

研究紀要

〔57〕

令和7年3月

大阪府立中央聴覚支援学校

目次

1. 2024年度 校内研究について …研究部
研究テーマ「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション
～子どもの学び・教職員を支える環境に視点をおいて～」
2. 幼稚部の実態把握と課題設定につながる評価の方法や指標について …幼稚部
考える
3. 「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション …小学部
～ICTを活用した授業改善～」
4. きこえない・きこえにくい子どもの見え方、感じ方に基づいた …中学部
授業リフレクション
5. 高等部における行事運営と進路決定についてⅠ …高等部
～文化祭運営編～
6. 高等部における行事運営と進路決定についてⅡ …高等部
～ことばと主体性を育む表現活動～
7. 「寄宿舎におけるリフレクションの重要性」 …寄宿舎
8. 全日聾研第8分科会 …小学部
絵画語彙発達検査結果の経時的変化 金森 雅
～幼児期低成績群児童の小学部での語彙発達～ 木村 純子
9. 全日聾研第8分科会 …中学部
学校間交流における成果と課題 明石 慈英
～多様な他者との関わりを通して
10. 本校における将来構想会議およびグランドデザイン作成・活用の …首席
取り組み 木村 純子
上田 章晶
11. 「つながろう みんなと 飛び出そう、社会へ」 …教頭
令和4-6学校経営推進費 事業の報告 堀谷 留美

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

研究テーマ 「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション

～子どもの学び・教職員を支える環境に視点をおいて～

1. テーマ設定の理由

日々の生活で行われている“リフレクション＝振り返り”は、学びの場である学校において、とても重要なことである。1990年代後半に登場した『総合的な学習の時間』がきっかけで、主に体験的な学習において、体験を学びとして構築するための教育手法として定着していた。しかし現在では体験的な学習に留まらず、学習の多様な機会にリフレクションの機会が設けられている。

コロナ禍に加え、医療技術の進展に伴い新生児スクリーニング検査が導入したことによる聴覚障がいの早期発見、乳幼児期からの人工内耳装用の増加、補聴器や補聴補助システムなどの進歩により、聴覚障がいがある幼児児童生徒を取り巻く環境は日々変化している。そのなかで、本校では単一の聴覚障がいだけでなく、他の障がいを併せ有する幼児児童生徒も年々増加してきている。幼児児童生徒一人ひとりの実態を把握し、指導支援を行いながら、集団での保育や授業を展開するためには、特別支援教育の専門的な技術や知識を得ながら保育や授業の質を高めていく必要があることから、テーマを設定した。

2. 校内研究会 報告

(1) 日時 令和7年2月14日(金) 16:00～17:00

(2) 研究発表

各部8分程度で3年間の取り組みについて報告を行った。

- ① 幼稚部 「幼児の実態把握と課題設定につながる評価の方法や指標について考える」
発表者 黒川 啓
- ② 小学部 「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション
～ICTを活用した授業改善」
発表者 桜木 東虎
- ③ 中学部 「きこえない、きこえにくい子どもの見方、感じ方に
基づいたリフレクション」
発表者 大山 遼太郎
- ④ 高等部 「高等部における行事運営と進路決定について」
発表者 稗田 裕治
- ⑤ 寄宿舎 「生活教育の実践を集団で振り返り、深める」
発表者 野村 徹典

※研究内容の詳細な報告は、各部報告にて掲載

1 目的

昨年度までの2年間、部内研では、『リフレクションをとおして考える幼児への関わり方』のテーマに沿って自立活動の観点から幼児の実態や保育実践についてリフレクション（ふりかえり）を行ってきた。そのなかで自立活動の3観点（言語・発音・聴覚学習）の視点が日々の保育に大きく関連していることがわかった。しかし、その3観点について実践や指導を考えるにあたり、“どのような指導支援が、どの自立活動の取り組みに関連しているか”という一貫した視点をもつことができる指標となるものがなく、評価が明確でないことが見えてきた。

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（2018年）では、「自立活動の意義として、個々の実態把握によって導かれる『人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素』及び『障害による学習上または生活上の困難を改善・克服するために必要な要素』いわゆる心身の調和的な発達の基盤に着目して指導するものが自立活動であり、自立活動の指導が各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っている。」と記載されている。つまり個々の学習や生活上の困難さ、不足している力を実態把握から見出し、適切に課題設定をして指導支援につなげることが重要ということである。そのため実態把握や課題設定には、高い幼児教育の専門性と聴覚障がい教育の専門性が必要となってくる。そして近年では本校幼稚園部でも聴覚障がいと他の障がいを併せ有する幼児の増加傾向にあり、より個別性の高い支援も求められている。

一方で幼児の指導支援にあたっては、他障がい種の学校からの転任者や聴覚支援学校での経験年数の異なる教員で行っているため、幼児の実態のとらえ方や指導支援の考え方などが混在しがちである。自立活動の基本的なねらいや指導方法、幼児の実態把握など教員間で共通理解したうえで指導支援にあたる必要がある。そして、幼児一人ひとりの教育的ニーズに合わせた支援を行い、聴覚支援学校の専門性を生かしたアプローチや指導支援につなげなければならない。

そこで、今年度は、幼児の実態把握のため以前作成され、使われていた指標『個別の指導計画「聴覚学習・言語・発音」に関する幼児の様子』を軸に、まずはその指標についての改善点や問題点を話し合うことにした。誰もが使いやすく、幼児の指導支援に共通した視点をもつことができる、新たな指標を作りあげることがめざしたい。また、日々の保育実践や指導支援の方法についてのリフレクションについても継続して行い、聴覚障がい教育の専門性の継承・資質向上のための講演会を通して学んでいくこととした。

2 今年度の取り組み

(1) 勉強会

① 方法

個別の指導計画を作成するときの「聴覚学習・言語・発音」に関する子どもの様子（以下、『子どもの様子』）という評価指標を用いて、指標の問題点・改善点を出し合い、検討する。

② 内容

（表1）

5～6月	『子どもの様子』（言語）を使い、幼児の達成度を評価する。
7月2日	『子どもの様子』（言語）の問題点や改善点、重複児の扱いについて意見交換
1月15日	『子どもの様子』（言語）の項目の見直しについて意見交換
2月	今年度の到達点の確認

③ 結果と考察

まず、現行の『子どもの様子』を使ってみて、そのときに気づいたことを出し合った。そのなかで、おおむね2点について問題点・改善点が出てきた。

- ・「いくつか」とはチェックする人によって評価が分かれるのではないか。いくつかのかがはつきりしない。
- ・「～でわかる」の「わかる」の基準がわかりにくい。「理解」と「表出」のどちらで判断すればいいのか、わかりにくい。

例えば、1段階に「色の名前がわかる」という項目がある。このとき「赤はどれ？」と幼児に尋ね、赤を選べたら理解しているということになる。「これはなに（色）？」と尋ねて「赤」と答えられたら、表出の面でも達成していることになる。しかし、理解はできていても表出が難しい幼児もいる。その場合、「わかる」と判断するかどうか迷ってしまうということである。

次に、「言語」の内容にしぼり、実際に『子どもの様子』の指標を改善するとすれば、どのような文言に換えればよいか、具体的に話し合った。『子どもの様子』（言語）は3段階29項目にわかれているが、そのうち1段階13項目を半分に分け、4つのグループで各グループ6～9項目について意見交換した。

前述の色の名前の項目では、理解を評価する項目と表出を評価する項目に分ける案がでた。また、1段階「身体名称がいくつかわかる」という項目では、この項目で言う「いくつか」というのはいくつかなのか、身体名称と言ってもなにをさすのかと議論になった。具体的な例を示したほうがいいのかということになり、「目、耳、鼻、口、手がわかる」という改善案がでた。3段階に「体の部位の働きがわかる」という項目があるが、これについても「目・耳・鼻・口・手足の働きを説明できる。」と具体的にするという話し合いになった。そのほか、各項目で出てきた意見は表2の通りである。

(表2)

段階	項目（現行）	項目（改善案）
1	自分の名前がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・下の名前を手話・サイン・音声でわかる（呼ばれて返事をする）。 ・愛称やサインネームでわかる。 ・指文字でわかる。
1	家族の名称がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・パパ、ママがわかる。（「パパどこ？」などと尋ねて目線をむける、指をさす）
1	色の名前（赤・青・黄・緑）がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・「赤はどれ？」と尋ねて、正しく選べる（理解）。 ・「これはなに（色）？」と尋ねて「赤」と答えられる（表出）。
1	身近な物の名前がいくつかわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・「身近な物」のカテゴリーが広すぎる。より具体的な物を示した項目に変えるほうがいい。
1	簡単な形（丸・三角・四角）がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・○・△・□のマッチングができる。
1	動物がいくつかわかる 果物・野菜がいくつかわかる 乗り物がいくつかわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・言われたものをとることができる。 ・手話ができる。 ・指文字で5つ答えられる。 ・書ける。
1	位置関係（上・下・前・後）がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・左右は入れなくていいのか？ ・位置関係がひとつわかる。 ・左右含め6つがわかる。
1	誰・どこ・何の質問の意味がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・「誰」がわかる。 ・「どこ」がわかる。 ・「なに」がわかる。 ・「誰・どこ・何」に答えられる。
2	自分の「氏名」がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた方法で確かめる。
2	勝敗がわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・かけっこ、玉入れ、じゃんけんなどの勝敗がわかる。
2	様子や動きを表すことばがいくつかわかる	<ul style="list-style-type: none"> ・動詞を表すことば（歩く、走るなど）がわかる。 ・形容詞を表すことば（大きい・小さいなど）がわかる。

2	ことばあそびができる（しりとりなど）	・しりとりができる。 ・ほかのことばあそびができる。
3	人称代名詞がわかる（ぼく・わたしなど）	・「ぼく」「わたし」の意味がわかる。
3	自分の誕生日がわかる	・自分の誕生日が言える。・答えられる。
3	体の部位の働きがわかる。	・目・耳・はな・口・手足の働きを説明できる。
3	ルールがわかる	・ルールを守って遊べる。 ・遊びのルールがわかって説明できる。
3	何月・何日・何曜日がわかる	・カレンダーがなくても今日の日付（月・日・曜日）を答えられる。
3	集合名詞がわかる（動物・乗り物など）	集合名詞が答えられる。

勉強会を通して、項目を細かく分けたり、具体例をあげたりして表記したほうがわかりやすいという共通確認ができた。幼児の実態を評価するために質問の仕方をこの指標とは別に用意したりしてはどうかという意見もあった。指標に加えて内部引き継ぎ資料などで可能な限り、記入するように運用すればよいとの声もあった。指標を作成するためには、年齢的にいつの段階で、どんな内容を認識していくのかという幼児の発達について学ぶ必要があることやエビデンス（根拠）となる資料をもっと調べ、知見等を得ておく必要がある。

今年度の研究では新たな指標をつくりあげるまでには至らなかった。しかし、話し合うなかで、意見交換ができ、一人ひとりの勉強になった。

（２） 保育の交流（公開保育）

① 方法

本校勤務年数の長い教員から順に早期教育相談と幼稚部各学年から一人ずつ公開保育を担当し、保育内容のリフレクションを行う。その際、指導案にはこれまでの研究で取り組んだ自立活動3観点を反映させる。また、ふりかえり会は、保育の良かったところ、参考になるところを中心に話し合うようにする。

② 内容

（表3）

実施日	学年	活動名
6/25	早期教育	どきどき わくわく やってみよう（段ボールを使った感覚遊び）
10/29	3歳児	カニをつくろう（製作）
12/13	4歳児	どんぐりであそぼう（季節の自然遊び）
2/18	5歳児	大きくなるってどうなるの

③ 結果と考察

保育の交流では、作成した指導案をもとに公開保育を行い、実施後グループワークを通して保育のリフレクションを行った。リフレクションの前には公開保育の当日に保育の参観ができなかった教員に対して、あらかじめ撮影しておいた保育の映像（動画）を見る機会も設けるようにした。

早期教育相談の保育は、1歳児対象の段ボール箱を使った感覚遊びだった。幼児が自然と動き出して遊び始めるしかけ（提示の仕方、タイミング）があって、興味津々な様子がみられた、早期教育相談の特徴である保護者に動いてもらう、保護者へのはたらきかけもできていた、アクシデントが起きた時もサブで保育に入っているT・Tのサポートがあってよかったという意見が出た。大きささまざまな段ボールを数多く用意し、その中から幼児が好きなものを選ぶように準備していたことも大切なことだという気づきもあった。生活があって、遊びがあって、それが言語の基礎になるということ学んだ保育となった。

3歳児の公開保育では、作品展に向けた製作活動の内容だったが、幼児に興味をもたせるため

の見本の見せ方や導入の工夫がよかった、作り方を幼児自身に考えさせるのがよかった、見てわかる、楽しめる内容だったという感想がきかれた。集中を保てる説明の仕方や幼児にわかりやすい手話表現は参考になったという声もあった。

4歳児の公開保育では、重複障がいのある幼児を含め、一人ひとりが自分で興味をもったことを大切にしている、こうでないといけないというしぼりがなく、いろんな遊び方をしてもいいという許容があった、遊びこむことで幼児の成長につながる、といった意見交換ができた。

どの保育にも自立活動の発音や言語、聴覚学習に関する内容が含まれていることを確認できた。また指導案に反映させたことで見ている側にも、保育のどの場面が自立活動につながっているのか、に気づくきっかけとなった。保育の交流を通じて幼児の実態の把握、教材研究、支援の方法などそれぞれが見直す機会となり、互いに学びあうことができた。

(3) 講演会

① 方法

夏休み中に「夏の学習会」として、外部講師を招いて、絵本の読みきかせについて学ぶ機会を設けた。絵本の読みきかせをする際の伝えたい要点や表現の工夫などを学んだ。

② 内容

(表4)

日時	8月27日(水) 10:00~12:00
テーマ	絵本の読みきかせの実際
講師	奈良県立ろう学校 教諭 吉本努 先生
内容	絵本の読みきかせの意味、方法(ポイント)、表現の工夫、保護者への働きかけ、読み書きへのつながりなど

③ 結果と考察

吉本先生のご経験に基づいた絵本の読みきかせについての講義では、絵本の読みきかせの要点が示され、挿絵を見ながらグループで表現方法を考えるなど具体的・实际的・体験的な学びの機会となった。

読みきかせの要点としては、

- ・聞き手の興味を持たせるためキーワードとなることばや表現を最初に持っていくこと。
- ・話し手との距離を保つこと(理想的なのは、2m程度)
- ・基本的に一人で行い、場所をなるべく変えないこと。
- ・スムーズなロールプレイを心がけること。
- ・幼児たちは「挿絵を読む」ので注意すること。
- ・挿絵にない文や、文のない挿絵もあるので気をつけること。などが示された。

絵本の使い方もイメージを持つために絵本を動かすこともあれば、ページのめくるときに先に話してからめくるか、あとにするかを考えることも必要。読んでいるときに、幼児と会話したり、気持ちをきき出したり、少し遊んだりしながら読み進めるなどをきき手の反応をみながら表現する大切さも語られた。喜怒哀楽の表現、心情の表現など表現の技術は手話を使った表現だけでなく身体表現をまじえることが大切とのことであった。

特に挿絵と文章に関して、大人にとって、文章は読む、挿絵は見るもの。幼児にとって挿絵は読むものという話は印象的で受講した教員の心に響いた。書かれている文章にこだわらず挿絵をメインに伝えたいことをはっきり見せる姿勢の大切さを学んだ。

3 まとめ(今後の課題)

今年度は、幼児の実態把握や課題設定につながる評価の指標について検討し、研究を進めてきた。また、教員の技量の向上や専門性を高めるために、研究保育や絵本の読みきかせ講演会を行った。

今後の課題を次のようにまとめた。

一点目は、評価の指標を作成することの難しさがあることである。さまざまな考え方や感じ方をもつ教員がいるなかで、ある一定の共通した見方を示すことでより一貫性のある指導支援を行うことができると考えた。しかし作成する前提で、まず乳幼児期までの発達段階を理解することが重要であると気づいた。そのうえで、聴覚障がいがある幼児にどのような指導支援を行うことが必要なのかを考えていかなければならない。今年度の研究では、『幼児の様子』の言語についてとりあげて話し合い、

検討した。結果、個々の教員にとって勉強になったが、新たな指標づくりを進めることは難しかった。指標づくりのためにはさらに学びや研究を深めていかなければならない。また他の障がい併せ有する幼児の指標については深めることができなかった。他の障がい併せ有する幼児の在籍が増えている現状のなか、今後検討していかなければならない課題である。

二点目は、保育交流の重要性についてである。保育を公開することで、保育者にとっては幼児の実態を把握し、その実態に合わせて教材選びや指導支援をするうえで大切にしたいことを考え、保育内容を作りあげていくという過程そのものが指導力向上に向けた練磨になる。さらに、その保育を見学したり、ともに振り返ったりするなかで、他の教員にとっても良い学びの機会となる。お互いの実践を交流する中で保育を高めていく取り組みをこれからも続けていきたい。

三点目は、聴覚障がい教育の専門性の向上を目指した取り組みは、本校のグランドデザインや学校運営計画とも密接に関連させて取り組む必要があることである。学校全体の方向性と全くかけ離れた取り組みをするのではなく、聴覚支援学校幼稚部として教員の専門性を高める研究が必要と考える。

以上のような課題を踏まえ、今後も研究を進めながら、より良い保育を行い、幼児の成長や発達につなげていきたい。

「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション

～ICTを活用した授業改善～」

小学部

1 はじめに

3年間の取り組みとして1年目はALACTモデルを活用した教員の専門性のリフレクションについて、2年目は講師を招聘して「聾学校における活用について」学習会を実施した。今年度は昨年度学習したことを再確認した上で、聴覚支援学校におけるICT活用について、さらにリフレクションを深めるために専門性の向上および継承に向けて、以下のことに取り組んだ。

- ① 法定年次研修の指導案検討会、討議会の実施、チェックリスト（授業アドバイスシート）（資料1）を活用した指導技術の向上
- ② 聾学校におけるICT活用の専門性向上の学習会の実施

上記の①・②を行うことにより、聴覚障がい教育の専門性の継承、およびリフレクションを深めることができ、教員の資質向上へとつながると考えた。具体的には下記の通り研究活動を進めた。

2 研究活動の概要

(1) チェックリストを活用した指導技術の向上

初任者研修や年次研修で研究授業を行う教員は、昨年度まで使用していた聴覚障がいの専門性チェックリスト（授業アドバイスシート）をもとに、自身で研究授業の振り返りを行った。また、そのチェックリストの集約を研究部が行い小学部教員の中で共有した。

(2) 授業後の振り返り

今年度の研究授業者はアドバンスセミナー（5～9年目対象）1名であった。今年度は、授業後に討議会を設け、参観者全員が参加する形で進めた。

(3) 学習会

小学部全員が参加する学習会を企画した。内容は次の通りである。

第1回

- 1 テーマ 聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション
～ICTを活用した授業改善～
- 2 日時 令和6年7月24日（水）10：00～11：30
- 3 目的 ICT教材に関する情報共有を行い、授業改善につなげる
- 4 内容 教材事例紹介、グループ討議

第2回

- 1 テーマ 聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション
～ICTを活用した授業改善～
- 2 日時 令和7年1月10日（金）16：00～17：00
- 3 目的 研究活動内容の報告および情報交換
- 4 内容 今年度の研究報告、来年度に向けての情報交換

3 研究活動の成果と課題

(1) チェックリストを活用した指導技術の向上

昨年度に引き続き、チェックリスト（授業アドバイスシート）を活用して年次研修の研究授業を実施した。チェックリストには聴覚障がい教育の専門性についての観点が明記されているため、授業者が授業を組み立てる上で参考にしてもらった。また、参観者は授業のどこに着目して参観すべきかが明確になったと考える。今後もチェックリストの活用を推進したい。

(2) 授業後の振り返り

昨年度に引き続き今年度も研究授業指導案検討会を取り入れた。昨年度は Jamboard を活用して事前に意見を入れてもらった上で、討議会でそれについて話し合った。今年度は事前に指導案を読んでもらった上で、授業者が指導案について困っていること・悩んでいることなどについて話をしてから意見交流をすることで、授業者自身や他の教員のリフレクションを図った。指導案や授業のイメージに関する質問を出し合い、「私だったらこうする」といった、指導案にはない他の視点の意見が続出した。授業者にとっても指導案を作成していく段階でリフレクションを実施でき、改善につなげることができた。研究授業討議会では、討議会参加者が意見やアドバイスを伝えることで、授業者だけではなく参加者一人ひとりが研究授業について日頃の授業と結びつけながら意見交換やリフレクションをすることができる場となった。

(3) 小学部学習会

第1回は、「ICT を活用した授業について」というテーマで、それぞれが授業実践を振り返り、教員間で教材に関する情報共有を行うことで、今後の授業改善につながる情報やヒントを得ることを目的として学習会を実施した。

前半、各教員が今までに使った ICT 教材について紹介し合い、教材のねらいや児童にとって良かった点、課題などを出し合った。国語、言語、算数、理科、社会の教科、合計7つの教材の紹介があった。報告者に対する事前アンケートでは、「選択肢を視覚的に提示しやすい」「アニメーションやイラストが思考や理解の助けになる」「実際に行かなくても現場に近い形で体験することができる」「子どもが主体となって実験結果をまとめられたことで理解が深まった」「複数の児童の考えを並べて見ることができる」「撮影して残せるため、振り返る手立てとなった」といった意見があった。これらの報告者の意見から、個別最適な学びを目ざした活用、協働的な学びを促すための活用、児童の学ぶ意欲を高め、主体的に理解することを目ざした活用、児童が活動内容に見通しをもつための活用など、それぞれの教員がねらいをもって ICT 教材を作成、活用している実態が伺えた。

【①教材について良かった点】

- ・視覚的に理解しやすく、イメージしやすい
- ・児童の興味・意欲を引き出す
- ・反復、継続して学習できる
- ・児童同士で共有できる
- ・児童が楽しみながら体験型学習ができる
- ・児童の実態に合わせてカスタマイズできる

【②ことばの獲得につなげるための留意点】

- ・イメージからことばへ結びつける教員の意識、手立て
- ・板書、掲示物、実体験の効果的な活用（併用）
- ・インプットからアウトプットへの移行
- ・児童が自分で ICT を使いこなす力

【アンケート調査結果】

- ・学習に活用できるアプリが欲しい。知りたい。
- ・動画編集が容易にできるアプリが知りたい。
- ・VR で社会見学などができるとよい。
- ・AI ドリルを含むアプリを導入し、家庭学習で活用できるとよい。
- ・現状に満足してしまっているの、他校の事例を知りたい。
- ・教員の ICT 活用技術獲得の手立て
- ・現状に満足してしまっているの、他校の事例を知りたい。

後半、テーマに沿ったグループ討議を行った。テーマは①紹介された教材について良かった点、②（理解できた内容を）ことばの獲得につなげるための留意点とした。

討議①の結果から、視覚的理解やイメージ化を促すために ICT の活用が有効であること、児童同士の意見の共有により、協働的な学びにつなげられること、児童の学ぶ意欲をより高められる可能性があることが示唆された。

討議②では、ICT を活用することで視覚的な理解を促し、児童がイメージ化できることがゴールではなく、さらに、ことばの獲得につなげるためにはどのような工夫が必要なのかという点について、議論を深めた。その中では、具体的なイメージを抽象的な段階へ般化させること、そのために、板書や掲示物等を併用したことばによる確認が欠かせないことや、実体験をことばに置き換える取り組みなどの重要性について議論された。ICT 教材を用いることで、児童にとって受け身の授業展開にもなりかねないため、授業の中で児童の表出場面を

意図的に作り出していくことが必要であるという意見もあった。さらに、児童が自分で ICT を使いこなす力を育てることにより、ことばの獲得に繋げていくことができるという点についても共有できた。

学習会終了後、小学部教員に向け、「ICT 活用に向け、ソフト面、ハード面で望むこと」を問うアンケート調査を実施した。このアンケート結果を受け、今年度の近畿聾教育研究会基本問題研究会小学部分科会における近畿各校の状況報告時に情報を共有することができた。

第 2 回は、今年度の研究の取り組みについて基本問題研からの考察も含めて研究部から報告を行った後、3 年間の取り組みについて教員同士で意見交換を行った。これまでの研究についてそれぞれの教員が思ったことを話し合う場とした。「タブレットは児童一人につき、一台があるが、1・2 年生はタブレットはあくまでサブ的な使い方。有料版のアプリも学校として導入してほしい。」「ICT をテーマにしていたが、テーマが広すぎた。1 年ごとにテーマを絞り進められたらよかった。」「紹介された教材をさらに使ってみての話ができる場があればよかった。」など様々な意見が出た。

今後に向け、必要な機器やアプリなどについて小学部としてさらに意見を出し合い、改善につなげていきたい。また、教員間で ICT を使ってみての疑問、悩み、ジレンマを共有し、今後も教材の共有や授業研究を通して、児童が主体的に学ぶ授業づくりへとつなげていきたい。

4 まとめ

今年度の活動を通して、それぞれが授業実践を振り返り、教員間で教材に関する情報共有を行うことができた。それによって、課題や悩み、ろう教育において大切にしたい点を確認し、共通認識を深めることができた。しかし、情報共有のみに留まり、授業改善に向けた具体的な検討までには至らなかった。今後、それぞれがどのように授業改善を行っていくのかという点を検討していく必要がある。

また、3 年間の研究を通して 1 年目に 3 年間の研究計画を十分に立案できなかったことが、研究の進行に影響を与えた。特に 2 年目、3 年目はリフレクションというよりも ICT 中心の活動になってしまった。1 年目に基礎を固め、2 年目に実践と改善、3 年目に成果のまとめと発展という流れで年度ごとの目標や具体的な活動内容を明確に設定していれば、より体系的な実践が可能であったと考えられる。また、リフレクションにおける知識不足といった課題も明らかになった。今後は研究の初期段階で長期的な計画をしっかりと立て、年度ごとに具体的な目標を定めることが重要である。そして ICT とリフレクションなどを同時に進めるのではなく、段階的に取り組むなど柔軟な研究テーマの設定を検討していく。

資料 1

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート

年 月 日 曜日 時間目 教科 () 指導者 ()

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	アドバイス (気づいたこと)
基礎的環境整備	1 児童は、授業の準備 (教科書など) ができている。		
	2 安心して授業に集中できる雰囲気がある。		
	3 必要のない情報が目に入らないように工夫している。		
	4 私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		
	5 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		
	6 互いの顔が見えるような机の配置になっている。		
基礎的な指導技術	1 指導案が適切に作成されている。		
	2 板書をわかりやすく工夫している。		
	3 考えを発表したり書いたりする場面を設定している。		
	4 教材やワークシートを適切に活用している。		
	5 単元名が提示されている。		
	6 めあて (目標) を提示している。		
	7 色分けしたりして、見てわかる板書になっている。		
	8 視覚的教材を活用している。		
	9 導入を工夫している。		
	10 話す速さが適切である。		
	11 明確でわかりやすい指示や説明をしている。		
	12 書かせるとき、話すときを区別できている。		
	13 児童の注目を集めてから話し始めている。		
	14 座り方や書き方の指導ができている。		
	15 児童に顔や口元が見えるようにしている。		
	16 児童に伝わりやすい方法 (手話, 指文字, 音声など) で表現している。		
	17 児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。		
	18 考えを発表したり書いたりする場面を有効に活用している。		
	19 児童が本時で学んだことを、自分のことばでまとめている。		
	20 児童がめあてを達成している		
ティーム	1 授業の流れを把握し、次の活動が円滑に進むようサポートをしている。		
	2 児童に、指導者を見るよう促している。		
	3 必要などきに児童の指導助言をしている。		
発展的な指導技術	1 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。		
	2 授業の流れがわかるような工夫をしている。		
	3 時間配分がうまくできている。		
	4 教員が授業づくりにおいて大切にしていることがある。		

その他

記入者 ()

1. はじめに

「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」を校内研究テーマに据え、令和4年度より3年間研究を進めてきた。本年度の中学部は27名（1年9名、2年8名、3年10名）であり、一人ひとりのコミュニケーションモードやきこえの程度、学習及び生活の実態は実に多様である。そのような中で、中学部では、本研究を通して、生徒一人ひとりの見え方や感じ方を教員自身が振り返るとともに、生徒も「本当にわかったのか」「自分はどんなことができるのか」を振り返り、生徒自身が「成長している」と実感できる中学部生活をめざした。本稿では、3年間の研究を振り返りつつ、子どもたちが社会で生き抜く力を育むために中学部の今後の展望について述べていきたい。

2. 研究活動

(1) 中学部の取り組み

① 授業改善～よくわかる授業をめざして

令和4（2022）年10月に行った中学部内研修「子ども・教員はどこを見ているの？」（中瀬浩一同志社大学教授）では、ろう学校の基本は「ながら」が難しいことを挙げ、子どもがどう見てしまうかを考えながら授業をすることを心掛けることを学んだ。そのうえで、ICTと非ICTの選択と組み合わせを検討することの重要性についても知見を得た。

i 社会科における授業改善

社会科では、紀要〔56〕にて報告した通り、「覚える」から「考える」授業づくりをめざしてICT活用の可能性を広げた。アンケートフォームを用いた小テストやドキュメントを用いたレポートはその例である。また、板書とスライド、電子黒板の組み合わせを工夫することで生徒の見え方、感じ方に応じた授業展開を意識した。授業の中で教員の役割も明確に分担しながら進めてきた。さらに、本年度も外部機関との連携を行い、「JA農協」や「奈良文化財研究所」の出前授業、「大阪地方裁判所」への社会見学を行った。こうした体験活動は、教科書での学びに加えて、新たな気づきや学びを得ることができ、実生活と結び付けて考えることに有効であることを再確認することができた。図1は、令和7年1月に収集した生徒向けアンケートの結果である。

図1-1 【質問項目：昨年度に比べて社会科はどのような印象がありますか】

全体回答者数 17名（対象 教科書に準ずる課程 全学年）

項目	回答者の割合（件数）
好きになった	17.6%（3件）
少し好きになった	41.2%（7件）
あまり好きではない	23.5%（4件）
苦手である	17.6%（3件）

選んだ理由（一部抜粋）【原文ママ】

- ・成績があがったから（4件）
- ・授業がおもしろいから（4件）
- ・出前授業があるから（1件）
- ・覚えるのが得意だから（1件）
- ・覚えるのが苦手だから（5件）

図1-1では、肯定的な回答が令和5年9月時点では25.3%だったのに対して、58.8%と向上がみられた。このことは、先述のとおり、社会科における授業改善が生徒にとってよくわかる授業になっていることがいえる。ただ、否定的な回答もあることから、生徒が授業に対してワクワク感をもち、自分の成長を実感できるような授業やテストのありかたを引き続き検討しながら進めていきたい。

図1-2 【質問項目：社会科を通して、身についたことや自分の力が伸びたと思うことは何か】

全体回答者数 17名（対象 教科書に準ずる課程 全学年） ※複数回答可

NO	項目	回答者の割合(件数)
1	世界の人々の生活や文化は、気候、その地域や特色などに大きく影響していることを学んだ	35.5%（6件）
2	地図の見方など社会科に必要な知識を身につけることができた。	23.5%（4件）
3	歴史の時代の変化について、何故起こったのか考えるようになった。	29.4%（5件）
4	歴史上の出来事に、時代背景から考えたり、他の人の立場になって考えたりするようになった。	23.5%（4件）
5	これから社会で生きていくためにどんなことが必要かを考えるようになった。	47.1%（8件）
6	日本の生活だけでなく、世界の人々のことも考えながら、社会をつくっていかうとする気持ちが起こった。	35.3%（6件）

図1-2の結果から、知識技能の習得だけでなく、主体的に物事を考えようとする意識も高まっていることがわかった。これらは、評価方法や評価システムの見直しを行ったことで、授業やテストの中で、単に知識を問うだけでなく、社会的事象や出来事の流れや意味を説明させたり、自分ならどうするかと身近な話題に置き換えて考えさせたりする発問および活動のありかたを工夫したことが要因と考えられる。社会科における授業改善については、引き続き取り組み、様々な研究発表の場において結果を明らかにしていく。

ii 総合的な学習の時間～探究的な活動をとおして

総合的な学習の時間（以下、総合）では、令和5年度より「NOBINOBI」という活動名のもと「答えのない問いに向き合う」ことに取り組んできた。これらは、先行きのみえないVUCA¹の時代がくることを想定させたうえで、「こうすればうまくいくかも」「もしかしたらこっちのほうがよさそうかも」「どうやったらいいかな」といった課題解決力を学年縦割り活動によって育てていく取り組みである（表1）。生徒は、与えられた課題に対して、一から情報を収集し、企画を練り、計画をたてた。そして、グループで話し合った結論を生徒全員及び審査員（教員や管理職がつとめた）の前で発表を行った。

表1 NOBINOBI 活動の概要

項目	時期	活動内容
NOBINOBI①	令和5年度1学期	中央聴覚支援学校がギネスブックに載るなら？
NOBINOBI②	令和5年度3学期	校内の「困ったさん」を助けよう
NOBINOBI③	令和6年度1学期	Chuorympicの新種目を考えよう
NOBINOBI④	令和6年度3学期	中央聴覚支援学校をバズらせたい！

このような活動をとおして、生徒たちは、異学年集団の中での自分の役割や立ち位置を振り返りながら、自身が持てる力を最大限に発揮しようとする姿がみられた。図2は本年度1学期に収集したNOBINOBI③後の生徒アンケートの結果である。肯定的な回答が8割以上であり、生徒自身がグループの中で充実感をもって課題解決にむけて取り組んでいたことがわかる。

図2 【質問項目：グループの目標は達成できたと思いますか】

全体回答者数 24名（対象 1～3年全員）

項目	回答者の割合（件数）
とてもそう思う	37.5%（9件）
そう思う	50%（12件）
あまり思わない	8.3%（2件）
全く思わない	4.2%（1件）

¹ VUCA…「先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態」を意味する。（Volatility 変動性・Uncertainty 不確実性・Complexity 複雑性・Ambiguity 曖昧性 の頭文字をとったもの）

選んだ理由（一部抜粋）【原文ママ】

- ・みんなの意見を全てまとめて、新しい競技を作れたから。（2件）
- ・先輩や後輩と一緒に話し合っ、計画してできたからです。（5件）
- ・楽しかったから。
- ・発表をがんばりました。
- ・話し合いがまあまあ進んでなかったと思ったから。
- ・笑っても楽しかったからです。
- ・最初はあまり合ってなかったけど、時間が経つにつれて、少しずつ楽しく相談したりし、少しはグループの仲が深まったのではないかなと思う。
- ・計画力が足りなかった。
- ・グループのみんなで結構話せるようになったし、総合の時間以外にも話すようになったから。

【質問項目：自分が頑張ったと思うことは何ですか】（原文ママ）

- ・発表、スライド作り、セリフ覚え（5件）
- ・表現力やみんなに伝わるようにわかりやすく手話を表した（3件）
- ・リーダーではないが、みんなの意見をまとめて新しい競技を作ったこと。
- ・グループを引っ張ること、グループ発表動画を作ること。
- ・考えること、考える力。
- ・みんなの意見を聞き出す事。
- ・はっきりとした手話と声で発表すること。
- ・リーダーが休んだ時に、みんなをまとめたこと。
- ・チームと協力して、仲を深めながら進めたこと。

令和7年1月に調査した NOBINOBI④前の生徒アンケートでは、下図のような結果が出た。本アンケートは、生徒自身の「自分はどうか」といった意識の変化を問うものであり、総合に限らず学校生活の全てを想定して回答させたものである。いずれも全体回答者数は23名（対象 1～3年全員）である。
図3-1 【質問項目：「なんでだろう?」「どうしてそうなるのだろう?」と普段から考えている】

項目	回答者の割合（件数）
とてもよくあてはまる	17%（4件）
あてはまる	39%（9件）
どちらともいえない	34%（8件）
全くあてはまらない	8.7%（2件）

図3-2 【質問項目：締め切りまでに、計画を立てて進めることができる】

項目	回答者の割合（件数）
とてもよくあてはまる	22%（5件）
あてはまる	39%（9件）
どちらともいえない	22%（5件）
全くあてはまらない	17%（4件）

図3-3 【質問項目：自信をもって、自分の気持ちや考えを伝えることができる】

項目	回答者の割合（件数）
とてもよくあてはまる	4.4%（1件）
あてはまる	52%（12件）
どちらともいえない	39%（9件）
全くあてはまらない	4.4%（1件）

図3のいずれも肯定的な回答が5割以上いることは、総合だけでなく、中学部における授業や委員会、部活動等の様々な場面において生徒自身が自ら考え、他者と交流を深めながら、様々な角度から物事を考えようとする力を発揮しているといえる。ただ、一方で否定的な回答も4～5割程度いることが明らかとなった。これには、コミュニケーションモードの多様化による話し合い活動のむずかしさや言語理解や想像力の差により、対等な関係の中で意見を出し合うことができにくいという課題が内在している

のではない。また、日ごろの活動の中で自分が「成長している」と実感もてない、もちにくいという自尊心の問題ともつながるのではないかと考える。まずは、多様な他者がいる環境の中で、お互いがわかる方法を探り、自分の意見や考えを伝えながら課題を解決していく姿勢をもたせていく方法を教員間で丁寧を確認していきたい。図3のアンケートは次年度も引き続き調査を行う予定であり、変化を分析しながら、総合の取り組み方を含めて中学部が目指すべき方向性をたしかめていきたい。

iii 近畿聾教育研究会基本問題研究大会における中学部分科会

本年度8月7日には近畿聾教育研究会基本問題研究大会（以下、基本問題研）が5年ぶりに集合形式で開催され、本校が主管を担った。午後は中学部の分科会を行い、近畿各府県のろう学校の教員が参集した。各ろう学校での実践を情報交換するとともに、ろう学校でのICTの在り方を見直すことを目的とした。本校中学部でのICTの設備状況はこの3年間で大きく変化しており、生徒も教員も授業等で積極的に活用していることを報告した。各校の情報交換では、ICTの整備状況が様々であることが明らかになった。授業におけるICTの活用状況も異なり、毎回の授業で活用する教員もあれば、使う頻度が月1回未満という教員もあった。最後のグループワークでは、デジタルホワイトボードを用いて「ワクワクする授業とはどんな授業なのか」というテーマで議論を進め、参加者同士の意見交流を行った。

② 交流活動

i 異校種との交流

他校種との交流については、第58回全日本聾教育研究大会（東京大会 第8分科会）にて報告した。報告レポートは、本紀要にも掲載されている。令和5年度に中学部が取り組んだ交流活動について、その成果と課題を明らかにしたものである。インターナショナルスクールや視覚支援学校、他府県のろう学校、地域の中学校等、多様な立場の同年代の子どもとのつながりを一層深めることで、自分と相手の立場をよく理解し、相手を尊重しながら物事に取り組む姿勢を養うことができると考えた。そこでは、コミュニケーションの成功・失敗体験を繰り返しながら、相手に伝わる方法を探り、自分の力を発揮しようとする姿があった。そうした過程を経て、自分に合ったコミュニケーション方法は何かを見直していく。これらは、「自分のことを知り、自分にとって必要なことを相手に説明する」といったセルフアドボカシースキルの獲得の一步となった。今後の課題として、聴覚支援学校における教職員数が限られていく中、持続的に取り組めるように、ねらいを丁寧に引き継ぎながら、活動の進め方を教員間で話し合っ進めていきたい。また、相手校が大多数である場合に、少人数である本校の生徒の心理的な受け止め方についても研究を進めていきたい。

ii 部活動交流

本校中学部には、運動部にバレーボール部（8名）と卓球部（14名）がある。休日には、地域の中学校と合同で練習や試合を行っている。スポーツの技能向上をめざすとともに、手話を軸に言語生活を送る本校の生徒と音声日本語による言語生活を送るきこえる生徒たちが、どのようにしてコミュニケーションを成立させ、関係を構築していくのかを学ぶ場ともなっている。本研究は兵庫教育大学中島武史准教授に研究協力（「ろう児と聴児の部活動場面におけるコミュニケーションと言語意識についての研究」JSPS 科研費 24K16057）する形で進めている。本年度はバレーボール部に焦点をあてて研究を進めてきた。表2は、中学校と合同チームを組む前にきこえる中学生の印象を本校中学部バレーボール部に尋ねたものである。

表2 【合同チームを組む前、きこえる中学生への印象】（原文ママ）

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・自分たちのことをわかってくれない？・悪口ばかり言ってそうなイメージ。・きこえないことを理解してくれない人・怖い印象・早口でしゃべる人がいるイメージ・強い中学生 |
|---|

きこえる人たちに対して良い印象をもっていないことが明らかである。バレーボール部では、地域の中学校と合同チームを男女ともに組み、休日のたびに合同練習を行ってきた。道具等も持ち運びしながらお互いの学校を行き来し、大会にむけて練習をともに積み重ねてきた。約1年間の練習期間を経て、

3年生の引退をもって合同チームは解散となった。その際に、収集したアンケート結果が表3である。

表3 【合同チームを組んだ後、きこえる中学生への印象】(原文ママ)

- ・きこえる、きこえないは関係ないと気づいた。
- ・優しい。指文字を覚えてくれる。
- ・きこえるきこえないに関係なく、一緒に練習してくれた。
- ・やさしい人もいればやさしくない人もいる。
- ・少数でしゃべる人もいるし、よくしゃべる人もいる。
- ・楽しく協力できる。

表3のとおり、きこえる、きこえないは関係なく、皆同じ人間であること、そこには様々な人がいることを学んでいった。「指文字を覚えてくれる」という記述からは、きこえる生徒が言語調整を行うことで、チームとしてのつながりを深めていったものと想像される。これらは、下図のアンケート調査結果からも明らかとなった。

図4 【合同チームを組んだ後に本校中学部バレーボール部部員に尋ねたアンケート結果】

あなたの経験に当てはまるものを1～5から選び、口に✓をしてください。	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	わからない
中学校と合同チームを組んで、楽しかった。	6	2	0	0	0
中学校と合同チームを組んで、技術の向上に役立った。	6	1	1	0	0
中学校と合同チームを組むことは、負担だった。	0	0	4	4	0
中学校と合同チームを組んで、きこえる中学生とコミュニケーションを取る自信がたった。	2	5	1	0	0
中学校と合同チームを組んで、中学生にきこえない・きこえにくいことを理解してもらえと思うようになった。	4	4	0	0	0
中学校と合同チームを組んで、中学生が手話をするようになった。	3	3	1	1	0
中学生に、手話を覚えて欲しいと思うようになった。	0	1	4	2	1
中学生に、手話を教えたいと思うようになった。	0	1	4	3	0
中学生に、手話で、試合や練習中の指示を伝えることができるようになった。	3	1	1	2	1
中学生に手話以外の方法も含めて、試合や練習中の指示を伝えることができるようになった。	4	3	1	0	0
中学生の、声での話が理解できるようになった。	4	2	1	1	0

きこえる中学生との合同チームへの印象がポジティブなものとなり、自分の「きこえない・きこえにくいことを理解してもらえ」と回答した生徒が全員であることは、部活動交流の意義を見出すことができる。また、「中学生が手話をするようになった」に対する肯定的な回答が約7割いることも興味深い結果である。さらに、「手話以外の方法も含めて、試合や練習中の指示を伝えることができるようになった」に対しては、肯定的な回答が約8割以上おり、様々な情報伝達手段を用いて、今自分がすべきことや相手にしてほしいこと等を相手に伝えようと行動に移す姿勢が養われたことがわかる。生徒たちが部活動交流を通して、きこえる人たちとの言語調整や方略を学んだことが、社会に出たときに多様な人が生活する共生社会を生きる力につながっていくと考える。卓球部でも、月1～2回程度、休日に地域の中学校と合同練習を行っている。個人競技ではあるが、コミュニケーションは必要不可欠であり、そこでの生徒同士の関係構築の過程の変化を観察していくといくつかの効果があげられた(詳細は本紀要全日聾研「学校間交流～多様な他者との交流を通して」を参照)。いずれにしても、きこえる中学生ときこえない中学生が同じ空間の中で過ごす場を設けることは意義深く、なおかつスポーツがもつ特性上、同じ目標に向かって取り組める環境があること、さらにそこではお互いに言語調整がしやすい雰囲気があることが重要である。また、ろう重複の生徒など一人ひとりの実態に対応できる指導者の体制づくりも重要であると考え。中島准教授の研究は今後も引き続き取り組まれる。本校中学部として、バレーボール部、卓球部ともに最大限に協力しながら、ろう児が聴者とかわる際にどのような言語調整や方略を行うべきかのヒントを得る手がかりとしたい。

③ 自立活動～セルフアドボカシースキルを高めるために

i わたしのロールモデルを探そう

ろうの先輩を招いて、お話をきく取り組みは、以前から行っており、紀要[56]P24～25(第57回全日本聾教育研究大会 奈良大会 第7分科会)でも報告したとおりである。中学部では昨年度より、2025年に東京で開催されるデフリンピックを視野に入れて、デフアスリートを多くお招きして、デフスポー

ツへの認知の向上と理解の啓発を図った。さらに、デフアスリート自身がきこえないことを周りにどう説明し、理解を呼びかけているかを知る機会ともなっている（表4）。

表4 令和6年度 ロールモデル企画の概要

時期	種目	内容
8月	水泳選手（2名）	講話＋実演披露
11月	サッカー選手（1名）	講話
2月	ボクシング選手（1名）	講話

図5 【質問項目：ろうの先輩の話聞きこうで、将来への希望を広げることができましたか】

項目	回答者の割合（件数）
とてもそう思う	13.3%（3件）
そう思う	60%（10件）
あまり思わない	6.7%（1件）
全く思わない	20%（4件）

図5は、令和7年1月に収集した生徒向けアンケート結果である（回答者数 17名）。約7割の生徒が自身の将来像を広げている。ろう教員以外の様々なろう者成人と出会うことで、自分自身の生き方を見直すきっかけになっていると考えられる。他方で、否定的な回答が約2割おり、中には「会社で働いている人の話をききたい」という意見もあり、次年度以降のロールモデルの選定ではそのような意見も踏まえ、生徒たちの興味関心やきこえの程度、生活環境を教員が再度確認しながら、どのような話題を提供していくべきかを検討していきたい。

また、11月には大阪府の事業の一つであるパラリンピアン派遣事業に中学部が当選し、車いすテニスのパラリンピアンにお越しいただいた。本事業は子どもたちにパラリンピックを身近に感じてもらうことを目的としている。本校にとっては、聴覚障がい以外の障がい者スポーツの実際に触れることも大切な学びである。選手のこれまでの生い立ちや車いすテニスとの出会いについて講話を聞き、実際に車いす操作の体験を行った。

表5 パラリンピアン派遣事業後の生徒の感想

生徒の感想（一部抜粋）【原文ママ】

- ・車いすのそうさがむずかしかったけど、たのしかった。
- ・先生がテニスをしているところを見て、私は「障がい者がするスポーツは普通の選手がするスポーツよりこっちがすごい気がするな」と思いました。来年のデフリンピックでみんなが「デフリンピックもすごいな」とそう感じてくれたら嬉しいなと思います。体験をさせていただき、ありがとうございました。
- ・体験を混ぜながらの授業はとても印象に残りました。障がいを前向きにとらえて生きることの大切さを学べました。とても楽しかったです。
- ・車いすを走らせる時、曲げたいときに回る方法があまりわからなかったが、大体のコツをつかんでやっと回れました。うでの体力が結構必要でした。車いすに乗る機会が少ない中、体験をさせていただきありがとうございます！

ii 電話リレーサービス

「電話リレーサービス」という言葉は、生徒にとっては目にしたことのある言葉ではあるものの、使用した経験が少なく、実際の様子を想像することが難しかった。そこで、令和7年2月8日に日本財団電話リレーサービスにお越しいただき、電話リレーサービスの概要と仕組み、利用登録、電話のマナーについてお話をうかがった。いつかは自分もユーザーとなるかもしれないツールを中学生のうちに体験することで、より身近な存在となるように体験会も開いていただいた。さらに、今回は令和7年1月にリリースしたばかりの「ヨメテル」の体験もさせていただいた。手話だけでなく、音声日本語を使用して生活を送る生徒もおり、多様な言語環境で過ごす子どもたちの選択の幅を広げる機会を提供することができた。今回の講話に対して、「わかりやすかった」と肯定的に回答する生徒は100%であり、生徒にとって貴重な機会となった。図6は、講話後の生徒向けアンケートの結果である（回答者数 18名）。

図6-1 【質問項目：あなたは、これから「電話リレーサービス」もしくは「ヨメテル」を使うと思いますか。

項目	回答者の割合（件数）
使う	33.3%（6件）
使わない	22.2%（4件）
わからない	44.4%（8件）

選んだ理由【原文ママ】

〈使う〉

- ・困ったなどに使えるから便利
- ・注文したいから。
- ・買い物したいから。
- ・親しい人と話す時通訳の担当に内容を知られるのは困るから。
- ・多分使うと思います、緊急事態の時誰か倒れた時電話リレーサービスを使いたいと思います。
- ・やったことないから入れようと思いました。
- ・病院の予約をするときに使うと思うから。

〈使わない〉

- ・普段使っているLINEで電話ができるから。
- ・電話できるから。
- ・将来手話使わないことがあるかも。
- ・電話する機会がないから。
- ・やり方がむずかしそうだから。
- ・親しい人と話すとき、通訳の人に内容を知られるのは困るから。
- ・普通に電話してもきこえるから。
- ・今のところは声だけで会話できるから。

〈わからない〉

- ・使うのはいつか分からない。
- ・大人になったらどうなるかな。
- ・なくても電話は使えるからまだわからない
- ・将来のことはわかりません。
- ・静かなところなら普段はふつうに電話していることが多かったから、もし大人になったら使用するかも。

図6-2 【質問項目：「電話リレーサービス」と「ヨメテル」なら、あなたはどちらを使うことが多いと思いますか。】

項目	回答者の割合（件数）
電話リレーサービス	27.8%（5件）
ヨメテル	16.7%（3件）
わからない	55.6%（10件）

選んだ理由【原文ママ】

〈電話リレーサービス〉

- ・手話でわかりやすかった。
- ・手話が分かりやすいから。
- ・手話の方がいいから電話リレーサービスの方がいいなと思いました。
- ・ほしいものを買うときに使いたい。

〈ヨメテル〉

- ・Wi-Fi や電波が悪くて手話がうまく読み取れないことがあるから。
- ・電話リレーサービスをやるとき外で置くスペースがなくてやりづらいと思ったから。
- ・使うかはわからないけどおそらくヨメテルは使いそうだったから。

〈わからない〉

- ・使ったことがないから。（3件）
- ・手話不安だから。
- ・あんまり使う事はないと思う。
- ・そもそも使わない可能性があるから。

将来のことはわからないという回答が多くを占めつつも、生徒が自分の生き方をどう見つめているかを示す興味深い結果となった。具体的にどのような場面で「電話をする」のかのイメージがまだ持てないということが要因とは考えられる。ただ、自分がきこえない、きこえにくいことを受け入れ、どのような方法でならきこえる人が多数の社会と関わっていけるかを明確にするまでには至っていないということも考えられる。もちろん、自分の使用言語を明確にしている生徒があったことも見逃してはならない。自分自身のきこえを知り、自分に合ったコミュニケーション手段、情報保障を選択できるようにするために、中学部の自立活動では「障がい認識」「聴覚学習」「手話」「書記日本語」を柱にたて、3年間をかけて指導を行っている。最後には、自分のことを説明し、周りに必要な支援への理解と協力を呼びかける方法を「トリセツ」²作成を通して考えさせている。今回の取り組み、アンケート結果を受けて、私たち教員は、生徒一人ひとりの障がい認識と向き合いながら、様々な情報提供を行い、選択の幅を広げる機会を設けることをより丁寧に行っていく必要があると考えた。さらに、異校種交流や職場体験、受験等を通して、生徒たちが自分自身に合ったコミュニケーション手段、情報保障を選択できるようにしていきたい。

² トリセツ…自分の取扱説明書。きこえや必要な配慮、相手へのお願い等を言語化し、まとめたもの。中学部3年生が自立活動において作成を進め、発表会を行っている。

3. まとめ

本稿では、3年間取り組んできた「授業改善」「交流活動」「自立活動」の3つの活動について振り返り、考察を述べた。生徒たちに向けたアンケートの結果からみえてきた活動の意義、改善点を振り返ることで、生徒自身が「成長している」と実感できる中学部活動にするための気づきを得ることができた。生徒一人一台端末が可能になったこと、電子黒板機能付き超短焦点プロジェクターや電子黒板が各教室に設置されたことなどICT環境が整ってきたことで、中学部の授業の展開は大きく変化した。スライドを活用した授業が増加し、視覚的な情報の提示がスムーズとなった。例えば、知らない言葉が出てきても、図（イラスト）を即座に示すことで、意味がわかり、イメージが持ちやすくなった。ただ、ICTは使うことが目的ではなくあくまで手段である。子どもたちが「ワクワクする授業」をめざすために、ろう学校での授業の基本や手話表現や板書のスキル、教材の見せ方等の授業研究にまでは至らなかったことが反省である。

将来的に生徒数の減少が見込まれるが、探究的な活動を引き続き行うことで、子ども同士の協働や課題解決力を育てていきたい。そこで子どもたちがいきいきと友だちと課題に向き合っている姿を外部に発信していくことが何より大切なことであると考え。そこには、「手話」を軸にした集団があり、みんなが主役となって取り組むことのできるろう学校ならではの良さがある。

本稿での研究結果から、学校間交流や自立活動を通して、自分を知り、他者に説明する力を育むことができつつあるとわかった。本校中学部では、居住地校交流に参加する生徒も多く、自己紹介を教員と一緒に考え、練習する時間を大切にしている。そうした一つひとつの教育活動が、「セルフアドボカシー」スキルの獲得の一步であり、高等学校や社会に出たときに役に立つと考えられる。生徒会では、毎年冬に「自分の思いを整理し、他者を信頼して思いを語る」活動を行っており、自分のことを中学部全員に伝え、きいた側がコメントを返していく取り組みを行っている。話す本人が時間をかけて自分の心の揺れを振り返りつつ、きいた側も相手の立場にたちながらも自分に置き換えて考える時間になっている。「振り返る」ことが、生徒自身の成長につながっている。次年度以降も引き続き、他者につながり、自分を発信していく姿勢を育てていきたい。そこでは、生徒自身が自分は今どのような力が育っていると感じているか、アンケート調査を引き続き行いながら、研究を深めていきたい。

1 はじめに

令和4年度新入学生から年次進行で実施される高等学校等新学習指導要領改訂を契機に、教科横断型の授業連携、特別活動、総合的な学習（探究）の時間に対する学校としての在り方を検討してきた。生徒の学びと自己実現を主においた教育課程を軸とし、学校教育の改善・充実の好循環を生み出すカリキュラム・マネジメントの実現、および本校の組織的な取り組みとして示した基本構想であるグランドデザインの3本柱「人とつながる」、「ことばを育む」、「未来を切り拓く」を包括するものとして、今回、生徒参加型の行事運営についてのリフレクションを行った。そこから、生徒たちが自分たちの希望する進路先につながる力を身につけるために、学科学年縦割型での話し合いや発表という場の設定の重要性が改めてわかった。VUCA (Volatility:変動性・Uncertainty:不確実性・Complexity:複雑性・Ambiguity:曖昧性)の時代においても基礎となる自分で考える力、その礎になる生徒一人ひとりの自尊感情の向上と自己実現を支援していくための環境設定の在り方について、教員自身が振り返るとともに、生徒たちが多様性を尊重しあい、主体的な活動の場として選ぶ学校行事とその先にある進路決定に向けて OODA ループ（観察→状況判断→決定→行動）を構築していきたい。このことから、次の2点を目的として研究を進めた。

- ・生徒支援における自己肯定感の醸成を目標とし、日頃の指導支援を振り返る。
- ・生徒の集団活動を通じた行事運営のなかで、役割や課題設定の重要性と卒業後を見据えた力の育成について考える。

2 方法と内容

高等部では、かねてより学科学年縦割型での取り組みがあり、今年度は令和6年度文化祭の持ち方について、生徒たちが半年かけて検討を行ってきた。そこから要望として、「人とつながる、未来を切り拓く」という観点から実行委員会方式を用いて、学年を越えた活動のなかで自分たちに必要な力を身につけていきたいという申し出があった。そこで、「文化祭と自己実現に向けてのアンケート」と題したものを実施前後でとり、その調査結果と今年度の進路実績という2つのデータから、それぞれのリフレクションを行った。

(1) 行事前後アンケート調査の方法

対象は、高等部の本科（普通科総合コース、生活応用コース、インテリア科、アパレル情報科）、専攻科（デザイン情報科）に今年度在籍する生徒21人とした。アンケートは5件法無記名式で行い、調査項目は文化祭、学校生活、進路についてそれぞれ2項目ずつ、計6つの事柄について全数調査し、その指標の変化を読み取り、分析した。

(2) 指標の変化における考察【全数調査における有効回答数20/21（95%）】

項目①「文化祭（行事）を学科学年縦割型活動としたことについて」の回答

とても良い（前11人→後15人、55%→75%）、良い（前5人→後3人、25%→15%）

普通（前3人→後2人、15%→10%）

微妙（前0人→後0人、0%→0%）、とても微妙（前1人→後0人、5%→0%）

生徒からの「学校文化継承」や「思いの共有」といった声を受けての活動内容変更もあったことから、下位評価にあった指数は全体的に上位に移行した。具体的には、電子黒板を用いて報告に使用しあったプレゼンテーションソフトでの発表においても相乗効果があった。特に、情報伝達手段の技術向上や伝わりやすい言葉を推敲する、より分かりやすい視覚支援を意識するという変化が見られた。また、早々に次年度に対する取り組みに対しての思いや他の行事、生徒会活動や生徒会役員について言及する生徒も増えたことから、今後の高等部における文化継承という展望についても示唆されていると考える。

項目②「実行委員会方式をもって生徒主体で行事運営することについて」の回答

とても良い（前10人→後11人、50%→55%）、良い（前7人→後6人、35%→30%）

普通（前2人→後2人、10%→10%）

微妙（前0人→後1人、0%→5%）、とても微妙（前1人→後0人、5%→0%）

以前より、生徒たちには「模擬店で取り組んでみたいこと」という思いがあった。しかし、今回は新しい取り組みの中で意見の集約と条件のすり合わせが十分にいきなかつたため、準備途中で内容の変更を伴うことにもなった。だが、そのことについて都度生徒間で話し合いの機会をもち、全体に周知して決定していくという過程を踏まえていたことから、下位評価にあった指数は上位に移行した。特に1年生は、問題が起こったとしても先輩と同じように毅然とふるまって、冷静に行動できるようになりたいという思いが強くなって指標が動いたことから、ロールモデルの形成が具体的に示されたと考える。

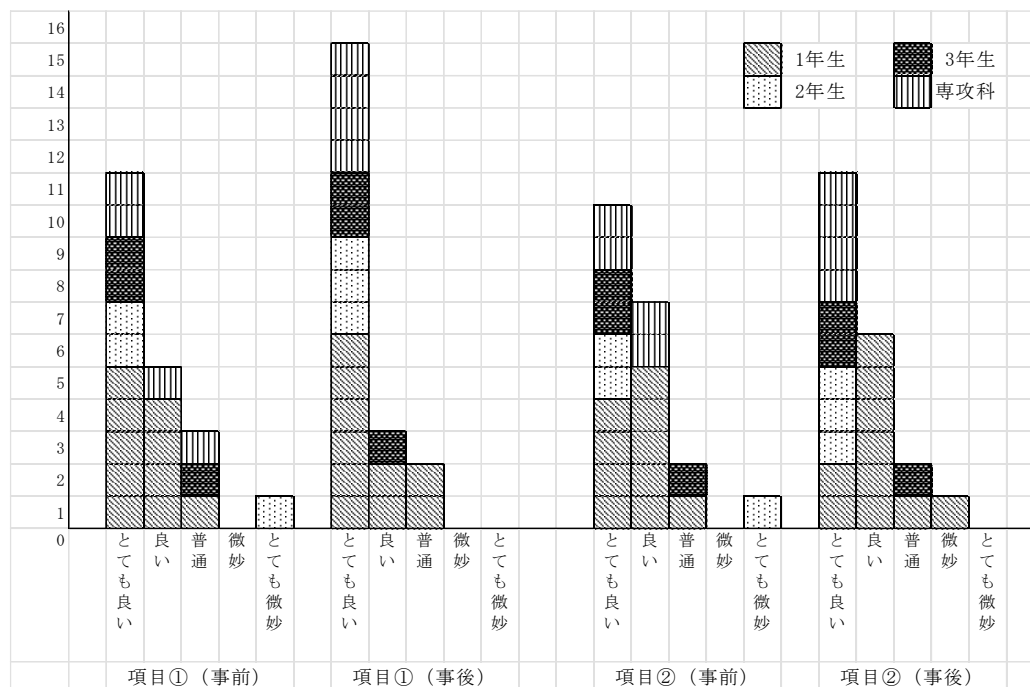


表1 アンケート結果 項目①②

項目③「係活動と自尊心の向上について」の回答

とても良い（前8人→後10人、40%→50%）、良い（前6人→後2人、30%→10%）

普通（前6人→後8人、30%→40%）

微妙（前0人→後0人、0%→0%）、とても微妙（前0人→後0人、0%→0%）

模擬店運営に向けて、係としての役割分担、様々な調整や進捗状況の確認といった活動は積極的に行っていた。指標としては、係活動において特に中心となって行動していた学年である上級生はより上位に移行し、先輩をたてることからあまり自分の考えを発信することができず、決まったことに従って動くことの多かった下級生は、自身の想像通りと考える結果を回答していた。このことより、項目①②での期待感をいかしていくためには1年生を中心として、個々にスポットを当てた支援が必要であったと考える。

項目④「文化祭（行事）と学校生活の関連性について」の回答

とても良い（前6人→後8人、30%→40%）、良い（前10人→後6人、50%→30%）

普通（前3人→後4人、15%→20%）

微妙（前0人→後2人、0%→10%）、とても微妙（前1人→後0人、5%→0%）

特別活動の目的は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」となっている。卒業後の社会が身近に迫っている専攻科の生徒は、他者と積極的にコミュニケーションをとって調整、発信することの大切さに気づき、行動していたことから指標が上位に移行した。反面、他の生徒は全体的には下がっていた。取り組みの意義を伝える、また、この経験がどんな力とつながっていくかといった観点での授業が必要であったと考える。

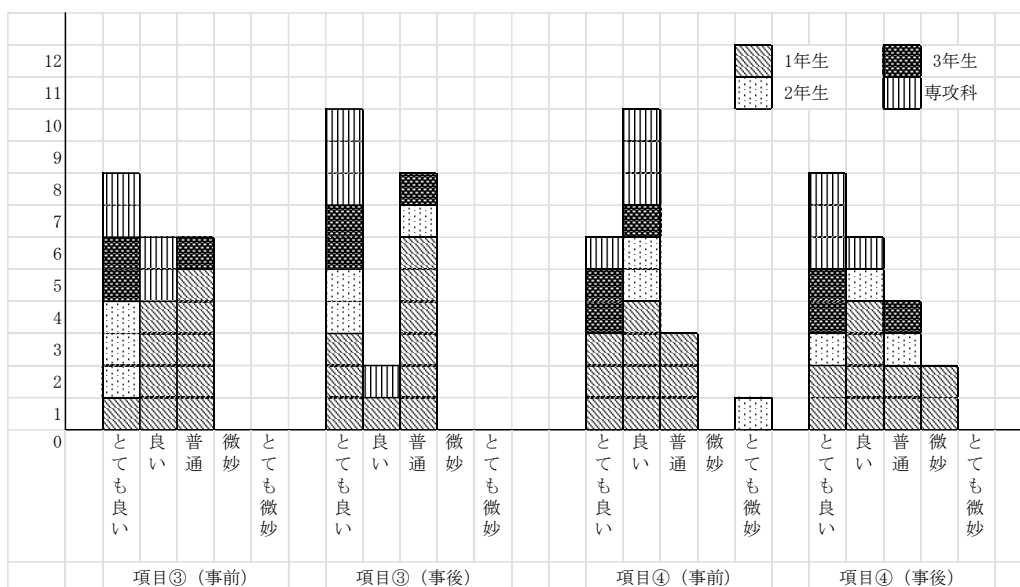


表2 アンケート結果 項目③④

項目⑤「文化祭（行事）が有益な経験となるかとの問いについて」の回答

とても良い（前6人→後7人、30%→35%）、良い（前8人→後4人、40%→20%）

普通（前5人→後5人、25%→25%）

微妙（前1人→後4人、0%→20%）、とても微妙（前0人→後0人、0%→0%）

事後の感想としては、「楽しかった」、「思い出に残った」という声が多数あがったが、文化祭活動目的のひとつであった「進路に必要な力を身につけるための成長の機会」には繋がりができていなかった。指標の移行値からは、1年生を軸として、取り組みの目標や目的の明確化といった具体的な事前学習と、その積み重ねが求められていたと考える。

項目⑥「文化祭（行事）が進路選択の一助となるかとの問いについて」の回答

とても良い（前4人→後4人、20%→20%）、良い（前4人→後5人、20%→25%）

普通（前7人→後5人、35%→25%）

微妙（前4人→後5人、20%→25%）、とても微妙（前1人→後1人、5%→5%）

項目⑤と同じく、教員側には卒業後に向けての力の育成という目的があったが、回答としては一番分散や変動が見られた。また、結果は専攻科や3年生の指標変化は小さく、1・2年生は大きく動いている。このことから、1・2年生の学校行事は、学びの場としての刺激は大きいですが、生徒たちが将来の展望を見出すものとまでには捉えられていない。しかし、学年を重ねて現場実習や社会体験の学習を経るにつれ、様々な経験が自分の選択肢を広げ、絞っていく材料となっていると推察できる。

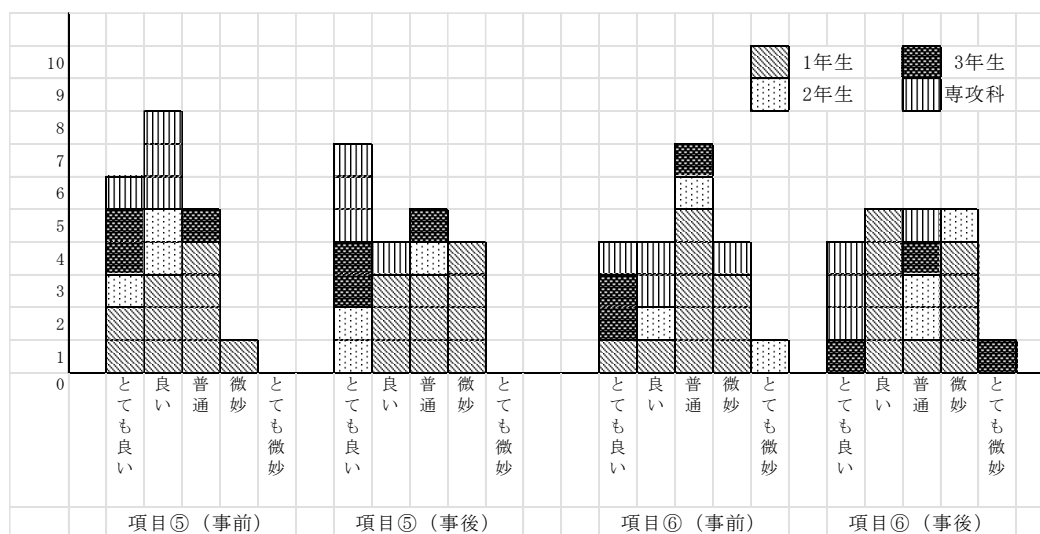


表3 アンケート結果⑤⑥

以上の項目①～⑥の変化より、子どもの学びの視点における学習指導要領「特別活動」の改善に対する具体的事項である「集団への所属感や連帯意識を深めつつ、社会的自立や社会貢献を念頭に置いた体験活動」という目的へは、一定近づいたと考える。また、リフレクションの観点ではその効果における、俯瞰→感情の肯定→行動の肯定→振り返りという学習活動を行うことができていた。教員のかかわりとしては、生徒と詰めていく企画段階での、調整不足や教員間の情報共有といった反省があった。しかし、生徒の自主性尊重が教員の業務負担軽減につながり、より適切な支援・指導方法を考える時間を生み出していたという利点もみられた。結果をふまえてより適切な事前事後指導と目標設定のあり方を検討し、実践、検証とつなげていくことが必要であるとする。

(3) 今年度の進路実績より

全国的に聴覚支援学校の生徒数が減少しており、本校の生徒数も減少傾向にある。しかし、本校は卒業後の生活に向けた3本の教育の柱として、①前述の学年を横断した取り組みを通じたロールモデルの形成 ②自己理解・自己発信するための自分の「取扱説明書」を作る学習 ③自己分析と進路の調整を行うための現場実習や校内実習を打ち立てている。そのことから、令和5年度厚生労働省調査政府統計における高卒3年以内離職率の37%を大きく下回る進路実績が達成できた。進路指導面では、生徒数の少なさからくる他者との比較の難しさや、高卒早期離職が起きる原因である企業比較のしづらさ、企業情報の不足が慢性的な課題としてある。これらについては、教員からの情報発信、生徒間での交流、保護者のサポートで補われ、卒業後の社会とのギャップを埋めることにつなげることができていると考えている。また、リフレクションの観点からは、俯瞰→確認の定着→フィードバック→反復という学習活動が、3本の柱のなかでできていた。今年度は、高等部の本科（普通科総合コース、生活応用コース、インテリア科、アパレル情報科）、専攻科（デザイン情報科）共に卒業生徒数は同数で、表4・5にあるように進路先にも大きな変化はなかった。先輩後輩という関係性のなか、それぞれが学校生活のなかで影響しあい社会へと進んだ結果であるが、今後も引き続き多様な生徒の夢に寄り添うべく、一丸となって尽力していきたい。

区別	生徒数	進 学						小計	就 職					小計	生活介護	自立訓練（機能）	自立訓練（生活）	就労移行	就労継続（A型）	就労継続（B型）	小計	合計	
		自校専攻科	他校専攻科	訓練校 能力開発校 等	専修学校	短期大学	大 学		自己就職（継続）		官公庁	企 業	家業従事者										自己就職 左記以外の
									自己就職	左記以外の													
高等部	本科 普通科総合コース インテリア科 アパレル情報科	男	6	1		1	1					3	3									0	6
		女	2	1								2										0	2
	本科 生活応用コース	男	2			1						1				1						1	2
		女	0									0										0	0
	専攻科 デザイン情報科	男	0									0										0	0
		女	1								1											0	1
	計	11	2	0	2	1	0	1	6	0	4	0	0	4	1	0	0	0	0	0	1	11	
令和5年度概要																							
①大学等進学について ・神戸学院大学グローバルコミュニケーション学部 1名 ・OSCAR専門学校 1名 ・自校専攻科 2名 ・能力開発校 2名						②企業就労について ・一般企業 3名 ・特例子会社 1名						③福祉施設等について ・生活介護 1名						④その他					

表4 令和5年度 高等部進路状況一覧

区別	生徒数		進学						小計	就職					小計	生活介護	自立訓練 (機能)	自立訓練 (生活)	就労移行	就労継続 (A型)	就労継続 (B型)	小計	合計	
			自校専攻科	他校専攻科	訓練 校等	能力 開発 校等	専門 学校	短期 大学		大 学	自己就職 (線表)													
											官公 庁	企 業	家 業 従 事 者	自 己 就 職 左 記 以 外 の										
高等部	本科 普通科総合コース インテリア科 アパレル 情報科	男	0						0					0								0	0	
		女	2	1						1	1				1								0	2
	本科 生活応用 コース	男	1							0					0	1							1	1
		女	1							0					0							1	1	1
	専攻科 デザイン 情報科	男	1							0	1				1								0	1
		女	1							0		1			1								0	1
	計	6	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	3	1	0	0	0	0	1	0	2	6
令和6年度概要																								
①大学等進学について ・自校専攻科 1名						②企業就労について ・一般企業 1名 ・特例子会社 1名 ・官公庁 1名						③福祉施設等について ・A型 1名 ・生活介護 1名						④その他						

表5 令和6年度 高等部進路状況一覧

3 まとめ

本稿では、この3年間で実施した学校行事のなかで特に生徒が主体となり、学習環境の変化が大きかった令和6年度文化祭について振り返り、考察を述べた。今回、アンケートの指標変化を日々の教育実践に当てはめることで、具体的に3点の気づきを得ることができた。1点目は、文化祭という大きな学校行事を経て、「集団への所属感や連帯意識を深めつつ、社会的自立や社会貢献を念頭に置いた活動を体験する」という目的へは、一定近づいていたということ。2点目は、生徒と詰めていく企画段階での調整不足や教員間の情報共有といった反省があり、事前事後学習における改善点が明確になったということ。3点目は、生徒の自主性尊重が教員の業務負担軽減につながり、より適切な支援・指導方法を考える時間を生み出していたということ。これらのことより、子どもの学びと教職員を支える環境に視点をおいてもOODAループの考察と状況判断を適切に行うことが、様々な好循環の礎となることもわかった。支援学校における高等部という最高学年において、生徒たちが多様性を尊重しあい主体的な活動の場として学ぶことのできる環境と、その先にある進路決定に向けてお互いに安心して刺激しあうことができる状況を設定できるように、聴覚障がい教育の専門性向上をめざしてこれからもリフレクションを行っていきたいと考えている。

1 研究課題と目的（はじめに）

高等部国語科では、改訂された新学習指導要領（国語科）の令和4年度からの施行を機に、大幅なカリキュラムの再編成を行った。特に、各教科等の教育内容と学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点、さらに生徒たちの実態にも基づき、「話すこと・聞くこと」の分野を授業時間に費やす必要性が増してきた。具体的に、国語という教科を通しては「ⁱ言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」を育むことが求められている。これらは、「主体的・対話的で深い学び」の核になるものでもある。

そこで、今年度高等部（国語科）では本校のグランドデザイン（令和6年度重点のとりくみ①）にもあるように、「生きたことば」や「社会を意識したコミュニケーション」を身につけるための活動の導入を試みた。それによって、生徒たちは与えられた教材（課題）をこなすだけではない表現活動を行うことができ、さらには、学校全体での「問題発見力・問題解決力」を育むための土台づくりにもつながれるのではと考えたからである。

本稿では、この1年間を通じた新たな取り組み内容、および生徒たち自身の評価や相互の学び合いを通して、その成果と課題を検証・考察していきたい。

2 研究方法（計画と実践内容）

これまでの高等部国語科では、各学期の定期考査5回（一学期中間・一学期末考査、二学期中間・二学期末考査、学年末テスト）によって、「知識・技能」および「思考力・判断力・表現力」の2観点を中心に評価を行ってきた。しかし、ⁱⁱ生徒たちが日々の学びを今後の人生や社会でよりよく生かすためには、「TPOに応じた表現方法」の習得時間や「生徒間の対話的な活動」の機会を充実させる必要性が生じてきた。そのような中で、「もっと生徒たちの好奇心や学習意欲、個性を引き出す学習へと切り替えられないか」という議論が教科内でも同時に起こり、今年度の実践へと至ったのである。具体的には、年に2回実施されてきた一学期中間考査と二学期中間考査の筆記試験に代えて、それぞれパフォーマンステストへと変更するというものである。全国的にも、教科書のテキスト内容に関して、「読み取ること（特に精読や文法構造の理解を重視した指導）」の依存度の高さが指摘されていた。それを受け、本校でも「ⁱⁱⁱリフレクション（自己理解・自己肯定）」、「探究的な学び」を通じた総合的な言語力育成の活動へと順次切り替えていった。

（1）令和6年度のパフォーマンス課題に関して

調査対象は、高等部の本科および専攻科に在籍中の「準ずる教育課程の全生徒12名」とした。年間の指導計画については、学期ごとに①スピーチテスト→②プレゼンテスト→③学習発表会（作品展時）の計3回にわたってパフォーマンスの場を設定し、一人ひとりの「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」を観察・評価した。なお、3回目の学習発表会については、普通科生活応用コースの生徒も参加し、学部全体でのパフォーマンス活動にすることができた。

各学期とも、まず事前指導としてスピーチやプレゼンテーションの型等の全体説明、取り組みの概要紹介から始めた。次に、スライド資料作成や発表原稿の推敲を重ね、直前リハーサル機会を設けた。その際、論理的な内容構成や資料デザインを盛り込むように注意を促した。さらに、準備開始から約1か月後のテスト本番時では、あらかじめ発表時間を指定した上で4人1組の学年縦割りグループを3グループ形成し、その中で一人ずつ順に発表していった。そして、発表を終えた生徒に対してその場ですぐ質疑応答の時間を取り、きき手（生徒および教員）と意見を交わし、そのやり取りも含めた上でルーブリックに基づいた評価を行った。なお、ルーブリックの評価規準については、「思考・判断・表現」から4指標（**テーマ設定**・**プレゼン構成<根拠、具体例>**・**資料や機器の扱い方**・**話者への評価**）、「主体的に学習に取り組む態度」から5指標（**情報分析もしくは自己分析**・**伝えるための熱意**・**好感度**・**TPOに応じた表現**・**ロールプレーと相互関心**）の2観点計9項目で、それぞれS～Dの5段階評価による目標準拠の評価を利用した。最後に事後指導では、本番時に撮影された他グループの動画も見ながら、自身の発表と対比させ、振り返りの時間とまとめ回とした。

表1 高等部国語科のパフォーマンステスト年間計画（令和6年度）

実施テスト名	実施期間	発表テーマ（全学年共通）
スピーチテスト	令和6年 5/13～15	「私が大切にしているもの」（約5分間）
プレゼンテスト	令和6年 10/7～9	「気になるニュースについて情報収集・整理・分析し、意見を述べよう」（約8分間）
学習発表会	令和7年 2/8	「外部の方々の前で発表しよう」

（2）調査研究法

今回の研究では、主に「授業内観察」と「質問紙調査」（自己評価）を中心に行い、他者評価による間接的な記録も集め、その中から課題や事実を見出し、考察へとつなげた。それぞれの学期ごとに、生徒たち各々が一定期間のスピーチやプレゼン学習を通して気づいたこと（できた点・改善点）をリフレクションし、振り返り用紙に記入した。そして、そのリフレクション用紙、他教科教員からのフィードバック、国語科でのルーブリックを総合した上で個人の成績に反映させた。なお、第2回の「プレゼンテーションテスト」の事前指導時には、あらかじめ生徒たちにもルーブリック表を配布し、対象者に評価規準の説明をしながら活動を実施した。そうすることで、生徒たち自身も課題点や得意な面を自己分析できるようになり、振り返りもしやすくなると考えたからである。

3 研究結果（記録の整理・検証）

（1）生徒たちの課題設定より

本稿でこれまでもふれてきたように、教育課程の基準の改訂に伴って、学力観も大きく転換してきている現状がある。これから複雑性を増す社会に進出し、予測不能な未来を生きていく生徒たちには「正解のない問題」に力を合わせて対処することが求められている。近年重視されるようになった「総合的な探究活動」においても、^{iv}自己の在り方と結びつけた課題を自ら見つけ出し、探究し、解決策を見出すという一連の流れが示されている。確かに、正確な知識をもとに素早く正答を導き出す力も、情報化社会の中では未だ大切なままであることに変わりない。だが、その認知的能力のみを身につけた状態では、進路目標の達成やその先の長い人生における成功には、必ずしも結びつかないとも言われている。そこで、今年度の国語科の取り組みでは「論理的思考力、表現力」の育成はもちろん、課題に向かう「積極性」や「好奇心」といった^v非認知能力の育成も心がけながら実施した。

まずは、「一人で考え→まとめ→表現する」という発表の基礎力を身につけることを初期の目標とした。それによって、生徒たち一人ひとりの興味が喚起され、将来的に、自分の個性を発揮できる分野が見つかることを期待したからである。以下に、今年度の生徒たちが自身のプレゼンテーションテストに用いた標題（タイトル）を載せておく。

下記の表2は、^{vi}4Mat（フォーマット）と呼ばれる考え方に基づいて、生徒たちのプレゼン標題を分類したものである。このタイプ分け理論によると、①Why型（35%）→②If型（25%）→③What型（22%）→④How型（18%）の順で、きき手の各タイプの関心の割合が決まるという（数値については、きき手全体の何%の割合でそれぞれのタイプが存在するかを記載）。

今回の国語科におけるプレゼンテストでは、「Why型」1名と「If型」1名の問い型のタイトルが確認できた。ただし、本番のプレゼンテーションの機会では、「If型」の生徒の方がより高評価を得られていた。これは「If型」のプレゼンスタイルの方が「生活で実践してほしい、もっと良くなってほしい」という、きき手の納得感と行動をより引き出す効果があったからだと考えられる。さらに言えば、実際に参観者のコメントシートについても、肯定的な回答が最も多かった。このことから「If型」の問いは、「もし自分たちの身にも同じことが起こったら…」という当事者意識をきき手に強く喚起できたものといえよう。

問いの型	課題の領域	自身の発表タイトル
What 型 (実態)	文化	私の好きな日本のアニメについて
	科学・技術	未来の電気自動車
	情報・メディア	SNS の誹謗中傷
What 型 (本質)	国際関係	デフリンピック
What 型 (本質)	国際関係	野球しようぜ！！
What 型 (事実)		ざわついた北京オリンピック
What 型 (定義)	科学・技術	ペロブスカイト太陽電池とは？
Why 型 (原因)		新札について～なぜ新札に変わったのか？
How 型 (対策)	生命・環境	野生動物を守るために私たちにできることは何か？
		私から見た日本の地球温暖化現象
	情報・メディア	AI の危険性とその向き合い方
If 型 (応用)	社会・生活	能登被災地 記録的大雨 ～私たちは、この災害から何を学ぶべきか～

表2 各生徒の題一覧 (プレゼンテーションテスト本番時)

このように、プレゼンテーションにおいて大切なことは、伝え手が目の前の聴衆に対して、「何のために発表するのか」という目的(ゴール)と、「どのように行動してもらおうのか」という他者意識を持って行うことの2点であるといえる。さらに補足として、この表を縦に眺めていくと、生徒たちが日ごろ気になっているニュースや事象への興味・関心は様々で、その考え方や個性も実に多様であることが同時にうかがえる。

(2) パフォーマンス後の振り返りシートから見た生徒たちの変容(成果と課題)

では、以上の取り組みを通して、生徒たちに発表前後でどのような変容があったのだろうか。第一回のスピーチテスト後の文章(改善点)と第二回のプレゼンテスト後(できた点・今後工夫したい点)の記述内容の変化を辿って行くこととする。その際、各学年から一名ずつ抽出し、より深い行動の内省と客観視がなされているものを下記にまとめた。

	スピーチ後(変化前)	プレゼン後(変化後)
Aさん(本科1年)	(スピーチ後)もったきいている人の興味を引くようなエピソードを入れた方が良かった。	写真をたくさん載せたところも良かった。次はインターネットの情報をただ集めるだけでなく、 <u>自分なりに理解してから集めることを意識したい。</u>
Bさん(本科2年)	とにかく <u>理想の形を、うまくプレゼンテーションに落とし込められるようにがんばる。</u>	自分でテーマを考えられたところ。(次回に向けて) <u>情報収集能力の強化。</u>

Cさん(本科3年)	スピーチとプレゼンテーションの大切さを知ることができたので、 <u>今後の就職活動に生かしていきたい。</u>	「なぜその画像を使ったのか」などの <u>質問に対応できるように、よりきき手の気持ちを尊重したい</u> と感じた。
Dさん(専攻科1年)	前のスピーチでは、声も小さく、前が見れなかったので、 <u>次回はできる限り改善できるようにしたい</u> です。	<u>目的をはっきりさせることや、きき手を意識することなど改めて知ることができて良かった</u> です。
Eさん(専攻科2年)	久しぶりに多めの前で、発表することがとても緊張しました。	十分な資料準備ができました。 <u>細かいところまで分析でき、新聞を読んで終わりではなく、インプットしてアウトプットする</u> 感じで何回か読みました。

表3 各学期での振り返りから見た生徒の記述の変化

まず、この表3の一番右側の列を縦に見ていくと、学年が下に行くほど、画像や写真を多く載せた感覚に訴えるようなスライド資料を多く取り入れていた。しかし、発達段階的に見ると、「ことば相互の論理的関係」を駆使しつつ説明し、表現する力にはまだ課題があるといえる。それに対して、学年が上に行けば行くほど、きき手への意識やどう伝えるべきかという意識を持つようになり、表3の文言についても、「情報の収集・整理」の反省の視点というよりは、どちらかと言うと、「情報の分析や活用」といった視点から自己のスライド資料をリフレクションしている。また、相手との関係性に配慮した発表をしたいと思う傾向が、学年が上がる(表の下部へ行く)につれ高まることが見て取れる。さらに、伝えるための意欲や自己肯定感については、ループリック表の2つの評価指標(伝える熱意・好感度)の結果から、半数の生徒に関し1回目と比べ2回目の成績向上が見られた(12人中6人がB→A、A→S評価へと変化)。これは、2度目の発表の方が、前回より丁寧かつ心を込めて相手に伝えたいという思いが、発表者の話し言葉・態度内に観察された点が大きく影響している。

さらに、総合的な言語力(読むこと・書くことも含めたプレゼンテーション力)の育成については、特にICTの活用とも併せて、各生徒のインプット手段の選択によって3つの評価項目(話の構成、情報分析・調査、TPOに応じた表現・説得力)に差が生じた。これは、インターネットの情報はもちろん、新聞紙からの情報収集や、^{vi}SDSフォーマットを用いた情報整理などを行った生徒が、少数ではあるが、いたためである。体系化されたニュース記事を読んだり、紙面上に発表の流れやスライド同士の接続関係を確認できる形でメモしたりした結果、論理的思考が働き、より伝わりやすい話の構成ができ上がったことが要因である。このように、「話すこと・きくこと」の能力向上は、それ自体単独で促されるものではなく、「知識及び技能」、「書くこと」及び「読むこと」の指導とも関連付けて行うことで、より相乗効果を生み出すことができるのである。

4 まとめと今後の展望

高等部国語科での「パフォーマンス課題とその評価」を中心に紹介してきたが、当初の目標であった「生徒たちが社会に出て活かせる言語運用能力・表現力向上」のための支援は、おおむね達成ができた。多くの観衆の前での発表(特にプレゼンテーション)では、自分や身近な共同体にとって切実な「深い問い」(現実的な対策、具体的な原因、創造的に解決できる応用)を含めると、よりきき手にも伝わりやすい。また、この活動の副次的な効用として、「話す・きく」用の授業やテストを展開しているにも関わらず、「読むこと」と「書くこと」の能力の大切さを実感できたという点も含まれる。

このように、1年間を通してこれまでの経験と学習を深くリフレクションすることは、聴覚障がいのある生徒たちにとって、深く意義のある機会となった。自分自身の成長、改善、変化を明確に理解する場を設定することは、未来に向けて「前向きに考え」「積極的にスキル取得」のできる社会人の育成につ

なかるものと考える。

高等部全体（本科生～専攻科生まで）の今後の展望としては、論理的な思考力や表現力、他者や社会への貢献心を持った良き「ロールモデル」を育成し続けることと、また、自己の在り方（立ち位置）を見つめながら探究していける「学習モデル」を模索し続けること、この2点を特に意識していきたい。今回の「スピーチ及びプレゼンテーション」、「学習発表会」の成果を生かし、生徒たちの「実感」・「関心」から始まり、そこで出てきた「気づき」を「知識」として高等部の皆で共有し、習得し、活用していくような学習の流れを構築していく。そのような探究的な学びを伴った学習プロセスは、これからの時代を生きる子どもたちにますます必要となってくることだろう。

ⁱ 文部科学省（2018年）.『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』の中において、各教科の特質に応じた物事を捉える視点である「見方・考え方を働かせる」ことや、「どのような資質・能力を育成するか考える」ということを強く意識するように示されている。

ⁱⁱ 変化が迫られている社会や世界の企業の中においても、複雑な問題に向き合うために「自分で考え、自らを動機づけ、自律的に学び、そしてチームと効果的に協働できる人」が求められている（ダニエル・ゴールマン+ピーター・センゲ.『21世紀の教育—子どもの社会的能力とEQを伸ばす3つの焦点』. p.181より）。

ⁱⁱⁱ リフレクション…「自分が使える能力や機会を評価・振り返り、自身のモニタリングをする力」のことである（徳吉陽河『結果を出す人はどんな質問をしているのか?』. p.136より）。似た言葉として、「エージェンシー」という概念があるが、これは「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」とOECDにより定義されている。

^{iv} 文部科学省（2023年）.『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開（高等学校編）』中の本文記述を参照。

^v 非認知能力…ここでは、「社会的能力」と「気持ちに関わる能力」と「意思決定能力」の3点とする。「社会的能力」とは、多様性を持った他者を理解し共感する力、人と関わる上で良い関係性を築くための能力の総称である。また、「気持ちに関わる能力」とは、自分の感情・考えを理解する力、自分の内面で起きる感情とうまく付き合っていくための力の2つの能力を合わせたものである（ダニエル・ゴールマン+ピーター・センゲ. 同上 p.192～196より）。

^{vi} 4Mat…「4つの敷物」という意味で、心理学者ユングの類型論に基づき、バーニス・マッカーシー（Bernice McCarthy）が開発し、実用化したものである。この4Matでは情報の受け手を4つのタイプに分類し、プレゼンテーションのひな型として活用することで、きき手を飽きさせず実行へと促すことができる（めがねばば 2024年.「[NLPの学び舎 NLP初学者からトレーナーまでのための学びサイト](#)」より）。

^{vii} SDS フォーマット…プレゼンテーションの際に分かりやすく伝えるための型の一種である。

①Summary（発表の概要）→②Detail（根拠や具体例などの詳細）→③Summary（発表全体のまとめ）の順に構成すると、相手に要点が伝わりやすくなる。短めの報告やプレゼン時に効果的。

【参考文献】

- ・著者：ダニエル・ゴールマン+ピーター・センゲ. 監修：井上英之（2022年）.『21世紀の教育—子どもの社会的能力とEQを伸ばす3つの焦点』.ダイヤモンド社
- ・徳吉陽河（2024年）.『結果を出す人はどんな質問をしているのか?』. 総合法令出版
- ・文部科学省（2018年）.『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』
- ・同上（2023年）.『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開（高等学校編）』

【参考ウェブサイト】

- ・めがねばば 2024年.「[NLPの学び舎 NLP初学者からトレーナーまでのための学びサイト](https://nlputilization.wixsite.com/website/post/blog-4mat)」. <https://nlputilization.wixsite.com/website/post/blog-4mat>.（参照 2025-02-06）

「寄宿舎におけるリフレクションの重要性」

寄宿舎

1 はじめに

この3年間 校内研究のテーマ「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション ～子どもの学び・教職員を支える環境に視点を置いて～」に従い、寄宿舎では「生活教育の実践を集団で振り返り、深める」というテーマで、年度毎に年間計画を立てすすめてきた。学習会については、1年目は塩見洋介氏を講師に招き福祉制度について、2・3年目は能勢ゆかり氏を講師に招き、「生活教育の実践を集団で振り返り、深める」について「障がいのある子ども理解・・・自閉スペクトラム症を中心に」について、それぞれ研修と事例研を合わせて実施してきた。

本稿では昨年度寄稿したテーマに基づいた2年間に引き続き、3年目の寄宿舎の取り組みを報告する。

2. 今年度の研修について

(1) 今年度の研修計画

昨年に引き続き寄宿舎の研修テーマを「生活教育の実践を集団で振り返り、深める」に設定しすすめることにした。寄宿舎は経験年数の長いベテランの職員と、今年初めて学校の寄宿舎で仕事をする職員が複数いる。昨今は、聴覚障がいのみならずほかの障がいを有する舎生が増えている。その中でこだわりが強く、場面での切り替えがしにくかったり、集団に入りにくかったりする自閉スペクトラム症の舎生がいる。寄宿舎生活をする上で私たち職員が、適切な関わりや、援助ができていだろうか。どのような関わりをしていけば有意義な支援につながるのだろうか。医学は日進月歩、研究解明されている。現在の自閉スペクトラム症について、初めて対応する職員や、経験のある職員も初心に戻って基本から学びなおすことを念頭におき研修をすすめることにした。

学習会・事例研は、能勢ゆかり先生（奈良教育大学非常勤講師）を講師に迎え、①自閉スペクトラム症について②自閉症のある舎生の事例を基に、私たちが学んだことをどう生かせたのかを1年間を通し研修することにした。

研修計画表

内 容	日 程
研修計画の決定	4月26日(金)
第1回 グループ討議	6月21日(金)
学習会（講師：能勢ゆかり：奈良教育大）	8月 2日(金)
事例研究会	8月 2日(金)
第2回グループ討議	11月15日(金)
紀要討議	1月31日(金)
舎内研修総括	3月19日(水)

(2) 第1回グループ討議

3つのグループに分かれ、自閉症の舎生数人について、職員の捉え方、関わり方、舎生の様子、特徴について意見を出しあった。

- ・絵で意思を告げることができる。
- ・服は自分の気にいった物しか着ない。
- ・お風呂は一人で入りたいので小さい風呂（ユニット）に入る。
- ・写真を撮られるのは嫌。自分の写真を掲示するのは嫌。

- ・名前はイニシャルにして欲しい。
- ・本校に気持ちが向いていない。
- ・寄宿舎のおやつを食べている自分の写真を撮ってSNSに挙げていたのを消す様にしたが、消すことを優先してしまったことで寄宿舎を余計に嫌になったのではないだろうか。
- ・他の舎生と関わりを持つことを好まない。初めはゲーム等で関わりをもっていたが、必要以上に部屋に勝手に入ってくるので入室もお断りするようになった。

(3) 学習会

能勢ゆかり氏から自閉スペクトラム症について学び、6月に行ったグループ討議の内容をもとに舎生Aの様子をまとめ報告し今後どのように支援し成長につないでいくことができるか検討していった。

講師 奈良教育大学 能勢ゆかり (奈良教育大学非常勤講師)

① 講演内容 (以下、講演資料)

障がいのある子ども理解・・・自閉スペクトラム症を中心に)

ア.自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder) について

(ア)DSM-5 (アメリカ精神医学界の診断統計マニュアル) による定義

自閉スペクトラム症は以下の二つによって特徴づけられる

- ・「社会的コミュニケーション及び対人的相互反応」の障がい

＝人との関わり方が障がいのない人と質的に異なる

- ・「行動、興味の限定された反復的な様式」＝こだわり、感覚過敏—鈍磨

しかし、これらは自閉スペクトラム症の一般的な特徴 (行動上の特徴) に過ぎない。

自閉スペクトラム症の〇〇さんを理解するためには、〇〇さんが、なぜ「人との関わり方が人と質的に異なる」のか、「こだわり、感覚過敏 (鈍磨)」があるのかを理解する必要がある。そうしないと必要な支援は見えてこない。そこで必要なのが発達の見点。

(イ)「人との関わり方が人と質的に異なる」ことと「こだわり、感覚過敏 (鈍磨)」の発達関連

a 生後2か月頃の発達の特徴 原始反射/快—不快/音のきき分け

※快—不快

- ・定型発達児 快—不快の窓の大きさに大差はない
- ・自閉スペクトル症 快の窓は小さい 不快の窓は大きい

自閉症の乳幼児の中に、抱っこすると泣き出す、なかなか寝ない、離乳食を食べにくいなどといった育てにくさが現われるのはそれが原因ではないかといわれる (逆に寝てばかりでおとなしく手が掛からなかったということもあるが・・・)

本来、不快を快に変えてくれる (オムツを替える、おっぱいを飲ますなど) お母さんの存在が、快と結びつき、母子関係が成立していくと考えられるが、自閉症児の場合、「快」と結びつきにくいために母子関係が成立しにくいこともある。きこえに障がいがあればなおさらである。

b 8か月頃の発達の特徴

知っている世界と知らない世界がわかる→人見知り、場所見知り

知らない人に抱っこされると大泣きする。しかし、大好きなお母さんに抱っこされていれば、知らない人に気持ちを向けることができる 知りたいけど怖い。怖いけど知りたい

※アタッチメント形式の基礎となる経験

アタッチメントとは…不安や恐怖、困難を感じたときにアタッチメント対象を安全基地として利用し安心感を得る関係であり、この安心感がある限り、外界探索をはじめとする 環境と関わる活動に従事することが可能である。し

たがって、楽しく遊んだり、目的に向かって活動しているときには働くことはなく、強く、大きく、賢い対象に対して向けられる一方向の関係である。

(講座臨床発達心理学④社会・情動発達とその支援 ミネルヴァ書房)

余談ですが…

アタッチメントが愛着と訳されることがあり、言葉の印象から「人にうまく甘えられない」「人とうまくかかわれない」ときに「愛着形成に課題がある」と評価されることがあるが、そういうことではない

c 9～10 か月頃の発達の特徴 相手の意図に気づく (からかい/共同注意) →ことばの種

※からかい:定型発達児…ティッシュを箱から出す

ー (笑いながら) コラッ! 叱られるー (相手の反応を伺いながら) ティッシュを箱から出すぞという仕草

ー (笑いながら) コラッ!ー やめとく

△つまり「あかんでえ」という相手の意図を読み取っている

: 自閉症児… ティッシュを箱から出す

ー (笑いながら) コラッ! 叱られるー (相手の反応を伺いながら) ティッシュを箱から出す

ー (笑いながら) コラッ!ー ティッシュを箱から出す…延々と続く

△つまり 視覚的な反応は理解できるが「あかんでえ」という意図を読めない

こういうとき…ティッシュの箱を片付けて見えなくするという方法がとられることがある。

しかし、根本的な解決にはならない。ティッシュの箱に感触の違うもの(布や硬い紙など)を入れて、感触遊びに発展させる。取り出したティッシュをつかって遊ぶなど好きな世界を大人と楽しみながら広げる。

d 1 歳半頃の発達の特徴 ○○ではなく△△だ/自我の芽生え

新版 K 式発達検査 「はめ板」課題

1 歳前半 ○○ダ

1 歳半過ぎ お手つき (葛藤) しながら正解にたどり着く

正解したときに検査者に「デキタゾ」という視線を送る

例えば、生活の中で…

お母さんがかばんを持つと…

・今までの経験から「あっ! お出かけや!」(○○ダ) と「つもり」をつくる

でも現実には、かばんを片付けただけでお出かけはしない。

・自分のつもりが崩れてしまい。怒ったり、泣いたりする。

「お出かけに行きたかったんやね。ごめんね。お出かけはしないけど、オモチャで遊ぼう」

・一旦、ちゃんと自分のつもりを受け止めてもらうことで、「お出かけデハナク、オモチャで遊ぶんだ」と気持ちを切り替えることができる。

しかし、自閉スペクトラム症児の場合は、視覚優位だったり、アタッチメント形成に弱さがあることで、なかなか切り替えられない。

●私が出会った人たちの話…キッシーさんのこと (20 才 認識 1 才半頃、自閉症)

▼生活が不自由になるほどのこだわりと他害

・気温の変化に敏感 (肌が弱い)

・物の位置に対するこだわり

…コップを乗せたお盆の位置へのこだわり、片付けようとする職員への激しい他害

対応1：片付けるときにトイレに誘い、見ていないうちに片付ける（対処療法）

→ずっと続けられないといけない。なんとかここを超えてほしい

対応2：お茶を飲む時間を固定し、片付ける時に「お茶飲んだし、もう片付けるわな」

「ここに置いておいてほしい気持ちは知っているけど、お茶飲むときにまた持ってこようかな」など丁寧にことばかけをしながら（一緒にできる時は一緒に）片付けられる。初めのうちは怒っていたが、一緒に片づけられるようになると納得して、次の行動に移れるようになる。

②舎生Aの実践レポート

ア 出生時：早産で産まれる

イ 就学前 聴覚支援学校

ウ 義務教育 知的支援学校

エ 現在 聴覚支援学校＋入舎

・寄宿舎があり、「Aが自立するのにいい」という保護者の希望で本校を選択

現在の様子

- ・本人は家のほうがいい。寄宿舎は月から水まで休み、木だけ泊まりたいと希望。家のほうがいいと言う。
- ・寄宿舎の職員が声をかけても拒否が多い。子どもたちに声をかけられると動く。
- ・部屋や廊下の蛍光灯のマークの位置/蛍光灯の色を揃えたい/…こだわり
- ・おやつを食べている様子をSNSにあげていた/…寄宿舎はダメなことを伝え消去
- ・風呂、トイレ付ワンルームみたいな部屋がいいと希望。
- ・自分の出生から自分の将来構想を年表に書くことがルーティン。
- ・下校時なかなか寄宿舎への気持ちの切り替えできない/「寄宿舎嫌い」
- ・キンキンに冷えたお茶が飲みたい

A理解のための職場討議（グループ討議）

- ・こだわりが強い…蛍光灯/お茶の温度/タブレット
- ・指示が通りにくい…人によって対応を変える
- ・「嫌い」を言うのは反抗期もあるのではないか

能勢先生より

寄宿舎に入ったら「Aが自立するのにいいよ」と勧められたが本人の思いはどうだったんだろうか？

Aは交渉できているけれど、応答関係はできていないのではないか。本人が納得する説明が大切。

アタッチメント形成の基礎になる経験のところ（安全基地）←そんな人をたくさん作ることが大切だ。アタッチメント形成ができれば、世界が広がる。Aの生活に入る。生活に寄せながら快を広げる。Aは私たちが思う以上にものすごい不安を抱えているのではないのか？

SNSは、本人にとって記録、記憶なのかも出生～生きている世界を残したい気持ちがあったのでは？それを禁止された影響は大きい。

ルールありきではなく、一人ひとりの子どもにとってどんな生活が必要かということを考えることが大切。

- ③ まとめ・・・答えは子どもたち自身もっている。子どもにきく・・・
- ・自閉スペクトラム症は、脳機能の異常によって起こる障がい 脳は可塑性の高い器官でもある。可塑性を発揮するためには「脳が喜ぶことをすればいい」

(精神科医 杉山登志郎)

- ・その子の世界に入って、何が「脳が喜ぶ」ことなのかを見極める その行為自体が、アタッチメント形成に影響する
- ・生活・集団のルール VS 脳が喜ぶ

- ④ 学習会 事例研を終えて
今回の研修で学んだこと

- ・関係の構築。
- ・寄宿舎の生活の在り方、見直しが大切。
- ・発達の原則 「人は必ず発達する」
- ・寄宿舎のルールについては、対話する中で気持ちに寄り添いながら丁寧に確認していく。
- ・様子については、連絡会や引継ぎ等で共有し、どのような関わりをしたら、舎生Aが快と感じ、いい方向になったときの情報交換を行っていく。
- ・1週間の予定と1日の予定を本人と確認していく。

(4) 第2回 グループ討議

第1回目と同じ3つのグループに分かれ、事例で出したAについて、夏の学習会で能勢先生の話を読み①全体での対応を変えたことについて(表を作成したことなど)②それぞれどのように変えたのか?(成果、問題点など)③今後の対応について、グループで意見を話し合った。

それぞれのグループでは、ひとり一人の職員が学習会前と学習会後のAの様子や指導方法などを振り返り意見を出し合い確認しあうことができた。

- ・集団に無理に入るようには勧めることはやめるようになった。
- ・本人の気持ちにできるだけ寄り添うようにしている。

(5) 最後に

本稿では、今年度1年間の研修の内容(自閉スペクトラム症)について書いてきた。近年は職員の入替わりも多く、他の支援学校から異動してきた人、今まで障がいがある人との関わりを持ったことがない人、支援学校で仕事をするのが初めての人もおり、基本から学ぶことを計画しすすめてきた。なぜなら、寄宿舎の仕事は交代勤務で宿直もある。宿直は3人から4人で行い経験がなくても大切な子どもたちと一晩、共に過ごすことになる。聴覚に障がいがあるだけではなく他の障がいのある子どもを理解し子どもの姿をどうとらえていくのかを職員集団で検討しすすめるためには、学習することは不可欠だと考えている。

寄宿舎の入舎を希望される保護者や、子どもたちは、学校に通うのに時間がかかるからだけではなく、「自立する力をつけて欲しい。社会性を身に付けてほしい。」と望んでいる。入舎して、時間をかけて自分の服をきれいにたたみタンスに片づけられるようになった。生活の中で自分ができることが一つ広がれば、その子にとってそれだけ自由が広がることになる。自由を求めることは人間の抑えることのできない本性ですから、子どもが自由を一つでも多くもつことは子どもの幸せが一つ増えることにもなる。

生活の場面ではがんばればできることは沢山あり、そのことで友だちや先生に褒められることで自信につながっていく。また寄宿舎は、異年齢集団で生活する場であるのでその中で生じる様々な問題について話し合うことが多い。子どもによっては職員が手助けする場面がある。職員はその子の気持ちを受け止めつつ、相手の気持ちを言語化して伝える。その子が自分のviewと相手のviewに気づき、折り合いをつけていくことが社会性を身につけることにもつながる。また、セルフモニタリングする力をつけていくことができる。

1回目グループ討議では、職員ひとり一人の知っている自閉症の特徴や捉え方について語りあった後、自閉症の舎生について、生活の様子や関わり方について討議をおこなった。それを受け昨年に引き続き能勢ゆかり氏を講師に迎えての学習会を計画し、「障がいのある子どもの特徴…自閉スペクトル症」を中心に学習会をすすめることにした。学習会では、スライドを使って基本から丁寧に話をしてくださった後、実際に能勢氏が関わってきた人の事例を交えてわかりやすく説明してくださった。引き続きAの事例を基に事例研究を行い、能勢氏から助言アドバイスをいただくことができた。

後日学習会、事例研で学んだこと、講師から出された意見と反省を鑑み、今までのAへの対応を振り返り、2学期からの対応方法について全体で確認を行った。

2回目のグループ討議は、Aへの対応の成果を確認するため、11月中旬に行い、確認した項目について、成果と問題点についてグループで討議をおこなった。こうして1年間同じ内容で追及し研修を行うことができた。職員のAへの対応を変えることで「安全基地」になる職員が増え、少しずつAの変化が現れてきた。「寄宿舍嫌い」の言葉はまだ出ているが、安心できる職員に自分から要求を言うようになってきた。寄宿舍生活でルールありきではなく、一人ひとりの子どもたちにとってどのような生活が必要かを念頭に置き課題や問題点を確認し、「生活教育の実践を集団で振り返り、深める」を今後も引き続き取り組んでいきたい。

絵画語彙発達検査結果の経時的変化

～幼児期低成績群児童の小学部での語彙発達～

全日本聾教育研究大会 第8分科会
大阪府立中央聴覚支援学校 金森 雅、木村 純子

【概要】本校では幼児児童に対し、毎年絵画語彙発達検査を実施している。今回、X年からX+25年の間に幼稚部年長から小学校6年生までの絵画語彙発達検査の結果を追うことができた62名のうち、幼稚部年長時の検査結果の語彙発達指数が49以下であった29名を分析対象として、小学校6年生時での語彙発達指数の変化を分析した。このうち、8名(27.6%)は6年生時に語彙発達指数85以上に達していた。このことより、小学校入学段階において、理解語彙の発達が乏しくても、経過のなかで小学校卒業時には、年齢平均相応程度まで成長する児童がいることが明らかになった。

【キーワード】 言語発達 絵画語彙発達検査 経時的変化

1 はじめに

きこえにくい幼児児童を対象とした絵画語彙発達検査の研究は散見される(富澤, 2014; 2017; 井坂, 2011; 川崎, 2006 etc)。一方で、絵画語彙発達検査の適用年齢範囲である幼児期から小学校卒業程度までの長期的な結果を追った研究は少ない。

今回、われわれは、幼児児童に絵画語彙発達検査を行い、その結果から幼稚部卒業時に低成績であった児童の小学部での経時的な変化を分析することができたので報告する。

2 方法

X年からX+25年の間に本校で、絵画語彙発達検査を実施した302名のうち幼稚部年長から小学部6年生までの結果を追うことができた62名の結果を対象とした。

解析1：幼稚部年長時の検査結果の語彙発達指数(語彙年齢÷生活年齢×100(富澤ら, 2017))が85以上であったもの(A群)、50～84であったもの(B群)、49以下であったもの(C群)にわけ、それぞれ補聴機器、知的障害の有無、裸耳平均聴力レベル(良聴耳)、小学校6年生時での語彙発達指数の変化を分析した。

解析2：C群のなかで小学校6年生時に語彙発達指数85以上になった改善群の各学年間の語彙発達指数の変化を算出し分析した。

3 解析方法

解析1：各群での補聴機器の種類、知的障害の有無、6年生時の語彙発達指数85以上の割合については、 χ^2 二乗検定を行い、有意差があった場合は、残渣分析を行った。各群の裸耳平均聴力レベルについては、クラスカウウォルス検定を行い、有意差があった場合は、マンホイットニーU検定を行った。

解析2：C群で六年生に語彙発達指数85以上となった児童の成績を比較するために、各学年間の成績の変化についてはFriedman検定を行った。

有意水準は、すべて5%とした。

4 結果

分析対象とした62名の概要を表1に示す。各群間で補聴機器や受けてきた幼児教育に差はなかった。ただし、C群において他の群に比べて裸耳平均聴力レベルが高く、知的障害が多かった。

表1 対象児の特性

	A群 (n=7)	B群 (n=26)	C群 (n=29)	p値
補聴機器				
人工内耳	0	3	5	0.457
補聴器	7	23	24	
知的障害				
あり	0	0	10 \square	0.001*
なし	7	26	19	
裸耳平均聴力レベル (良聴耳)	80.71 ± 26.01 dB	76.30 ± 18.46 dB	94.29 ± 22.88 dB \square	0.01*

\square 群はA, B群に比して有意差あり *有意水準: <0.05

解析1: A群は7名(11.3%)で、6年生での語彙発達指数85以上は6名(A群の85%)、B群は26名(41.9%)で、6年生での語彙発達指数85以上は14名(B群の53.8%)、C群は29名(46.8%)で、6年生での語彙発達指数85以上は8名(C群の27.6%)であった(表2)。C群は他の群に比べ6年生時に語彙発達指数が85以上となった児童の割合が少なかった。また、知的障害がある児童で、語彙発達指数が85以上となった児童はいなかった。

表2 各群の人数および6年時語彙発達指数85以上の人数

幼稚部年長時語彙発達指数	人数	6年時語彙発達指数85以上
A群(85以上)	7	6
B群(50~84)	26	14
C群(49以下)	29	8*

*C群は他の群と有意差あり。

解析2: C群のなかで小学校6年生時に語彙発達指数85以上となった児童8名(C-改善群)の各学年間の平均値と標準偏差を表3に示す。5歳から1年生での成績の伸びが一番大きい傾向があったが、各学年間での成績の伸びに有意差は認められなかった(表3)。

表3 C-改善群の各年代間の改善群の語彙発達指数の变化の平均値および標準偏差

平均 \pm SD
5歳~1年: 10.41 \pm 14.32
1年~2年: 8.89 \pm 13.15
2年~3年: 5.24 \pm 10.50
3年~4年: 8.53 \pm 10.79
4年~5年: 9.35 \pm 11.54
5年~6年: 6.84 \pm 5.50

5 考察

富澤ら(2017)は、人工内耳装用児の4~7歳までの語彙力の経過を整理し、36.4%が就学時期までに生活年齢相当の理解語彙力を獲得していることを報告している。また、加藤(2023)は、これまでの絵画語彙発達検査に関する研究について、横断的データの比較にとどまっており、受容言語の発達を示した研究が少ないことや、聴覚医学領域で行われた研究が多く、理解語彙が不良であった児への対応が不十分であることを指摘している。

今回われわれは、幼稚部卒業から小学部卒業まで6年間の長期的な絵画語彙発達検査結果を後方視的に分析した。その結果、小学校入学時点で年齢相応程度の語彙力を身につけていた児童は1割程度であったこと、また、幼稚部卒業時に成績不良であった児童のなかの3割程度が小学部卒業時には、生活年齢相当程度の理解語彙力を獲得していた。また、各学年間の成績の伸びを分析するために傾きを算出したところ、いずれの学年でも他の学年に比して有意な伸びではなかったが、年齢増加分以上の伸びを認めた。高学年に伸びが鈍化する傾向があったが、これには、天井効果の影響が考えられた。

以上から、今回の小学部入学段階において、理解語彙の発達が乏しくても、明らかな知的障害や行動障害等がなければ、小学部6年間で自分のペースで発達していく児童が存在することが明らかになった。また、ある特定の期間に顕著に伸びるのではなく、毎年着実に成長を認めた。

6 研究の限界

今回の研究は、後ろ向きの研究であった。特に、幼児期低成績群の中で成績改善した群については、対象となった児童数も少なく、バラつきも大きかった。そのため、その結果にいたった要因については、明らかにすることができなかった。また、今回は、ある地域の1校のみのデータであり、このデータには、本校の地域性や教育方針等が影響している可能性がある。これらについては、今回の今後の課題としたい。

【参考文献】

- ・井坂行男. (2011). 絵画語り発達検査を用いた聾学校児童生徒の語彙能力の変化. 特殊教育学研究, 49(1), 11-19.
- ・富澤文子, 河野淳, 芥野由美子, 野波尚子, 西山信宏, 河口幸江, ... & 斎藤友介. (2014). 中学校以上に進学した人工内耳装用児における聴取・発話・語彙力の検討. *Audiology Japan*, 57(4), 250-257.
- ・富澤文子, 河野淳, 野波尚子, 鮎澤詠美, 梅村大助, 西山信宏, ... & 塚原清彰. (2017). 人工内耳装用児の小学校就学前後期までの語彙力の検討. *Audiology Japan*, 60(6), 500-508.
- ・川崎美香, 森寿子, 黒田生子, & 藤本政明. (2006). 人工内耳装用聾児と補聴器装用聾児の語い理解力からみた問題点の比較・検討. *Audiology Japan*, 49(1), 51-62.
- ・加藤哲則. (2023). 聴覚障害児の聴覚言語発達に関する研究の動向. 愛媛大学教育学部紀要, 70, 106-115.

学校間交流における成果と課題～多様な他者との関わりを通して

全日本聾教育研究大会 第8分科会
中学部 明石 慈英

【概要】きこえない・きこえにくい子どもたちの将来を見据えるうえで、他者とつながる力や社会で活躍する力をいかに伸ばすかは重要な課題である。その知見を広げる経験ができるように本校中学部では、昨年度様々な学校間交流に取り組んだ。本発表では、その取り組みについて紹介し、多様な他者との出会いを企画することの成果と課題及び子どもたちのコミュニケーション方法に対する意識の変化について分析し、自己の障がい認識受容にどのようにつなげていくかを考察する。

【キーワード】学校間交流 コミュニケーション 障がい認識

1. 目的

本校は、早期教育相談から高等部専攻科まで設置している。幼稚部から視覚言語である手話をベースとしたコミュニティの中で育ち、それに加え、中学部では地域の小学校から進学してくる子どももおり、それまでの集団から発展させた新たなコミュニティを作り出すことが求められてきた。そのため、総合的な学習の時間（以下、総合）を中心に縦割り活動を積極的に行っている。日ごろの授業では関わりが少ない学年を超えた探究活動を進める中で、リーダーシップをとってグループをまとめたり、必要な情報を集めグループに意見を伝えたりする姿がみられた。もちろん授業でも、ペアワークやグループワークを積極的に取り入れ、友だち同士での対話的な学習を促してきた。そうした活動を通して、様々な意見に触れ、課題解決をめざす力を育むことができた。しかしながら、きこえない子どもたちの将来を見据えた時、学校外に飛び出して、様々な立場にいる同年代の子どもとのつながりを一層深めることが重要である。同年代の子どもとの交流を通して、自分と相手の立場をよく理解し、相手を尊重しながら物事に取り組む姿勢を養うことを取り組みの目的とした。

2. 具体的な取り組み

本校中学部は、昨年度は31名の子どもたちが在籍していた。自立活動や総合の時間に学校間交流を企画した（表1）。多様な他者との対話場면을積極的に取り入れるために、レクリエーションを中心に進め、遊びの中で対話が自然発生的に生まれるように意識した。結果として、目の前の課題に対して一緒に考えたり、話し合ったりする場面が多くみられ、活動の質の高まりにつながった。

表1 令和5年度 本校中学部の学校間交流

時期	対象校	活動内容
6月	インターナショナルスクール	ASL 自己紹介 レクリエーション 学校案内ツアー
12月 1月	地域の中学校	学校紹介動画 レクリエーション 授業体験
1月	視覚支援学校	点字名刺交換 レクリエーション ランチ交流
2月	他府県のろう学校	【オンライン】 自己紹介 ディスカッション
年間	部活動交流	バレーボール部 卓球部

(1) インターナショナルスクール

外国にルーツのある子どもたちが在籍するインターナショナルスクールと本校の交流は初めてである。ASLを使った自己紹介や司会原稿の英文を事前に生徒に考えさせることで、英語に親しむ機会を設けた。当日には、相手校も日本の手話による自己紹介を準備してきており、お互いにわかるコミュニケーション方法でのやり取りから展開した。初めは緊張していた子どもたちも交流が進むにつれ、英語でやり取りをしたり、身振り手振りをういてコミュニケーションをとったりする様子がみられた。レクリエーションを通して日本の手話や英語を教え合い、自分たちの言語がお互いに受け入れられている実感を持ち、言語や文化が違ってともに楽しい空間を作ることができることを学んだ。

(2) 視覚支援学校

本交流は、事前準備として点字による名刺作成から始まり、目の見えにくい人との接し方も確認した。当日実際に関わっていく中で、廊下の歩き方やご飯の食べ方、物を触るときの様子を観察したりし、きこえない人たちとは異なる生活習慣を感じ取った。子どもたちは、誰が話しているのか明確にするために、相手の目の前まで行くことを徹底したり、また物を触るゲームでは、どこに物があるのかがわかるように相手の手を誘導したりする様子がみられた。感想をきくと、「学校のこと、相手のことを知ることができてよかった。目が見えない、見えづらい人がどんな風に過ごしているのか、自分と違うところがあるということを知れて勉強になった。」「相手になかなか伝わらない時がたくさんありました。しかし、自分の力で、時間をかけて伝えることができました。またたくさん話したい。」とあり、違いを認識する過程の中で相手のことをより知りたいという気持ちを高めることができた。

(3) 部活動

本校には、バレーボール部と卓球部があり、休日には地域の中学校と合同で練習や試合を行うこともある。部活動交流は、他の交流と異なり、日常の生活場面に近い環境下での交流となり、双方の自然なコミュニケーションが期待できる。実際に、スポーツの技能向上をともに図る中で、周りを見ながら情報を自ら集めたり、分からない時は相手にきいたりする姿勢が養われている。また、きこえる人の行動様式やマナーを見ることも、子どもたちにとって新たな学びとなっている。他方で、きこえる子どもたちにとっても、きこえない子どもたちの手話でのやり取りや手話通訳者が前に立っていることを目の当たりにして、「手話が大切な言語であること」を自然に学んでいくのである。部活動における学校間交流は、きこえる子どもときこえない子どもの共生を促す場所となっている。

3. まとめー成果と課題

聴覚支援学校に在籍する子どもたちは、手話や視覚的な情報が保障された環境の中で育ってきている。学校間交流を通して、必ずしも相手に伝わるとは限らないコミュニケーション環境を経験し、どのようにすれば相手に伝わるか方法を探ったり、自分の力を発揮したりする姿がみられた。このようにコミュニケーションの成功・失敗体験を積み重ねていくことができた。そうしたさまざまな人との関わりを通して、これまでの保護者や教職員、友だち関係とは異なる新たな集団に出会い、自分に合ったコミュニケーション方法は何かを見直していくことにつながった。これらは、「自分のことを知り、自分にとって必要なことを相手に説明する」といったセルフアドボカシースキルの獲得の一步となる。本校が作成している「自立活動プログラム Ver3」においても重要な位置づけにあり、卒業までに「自分の説明書」を作成し、自分自身について記述ができるように指導を行っている。そのきっかけを教職員が戦略的に企画することが重要であると再認識した。

今後の課題として、今後聴覚支援学校における教職員数が限られる中、交流のノウハウを引き継ぐことが求められる。単発的な取り組みで終わらせるのではなく、持続的に取り組めるように学校全体で学校間交流の方向性を確かめながら進めていかなければならないと考える。

本校における将来構想会議およびグランドデザイン作成・活用の取り組み

首席 木村純子 上田章晶

1 はじめに

本校では、近年の在籍児数の減少や実態の多様化を受けて、令和4年度末に管理職・首席・部主事を中心に、本校の今後の在り方を検討する場が設けられた。令和5年度からは「将来構想会議」を発足させ、教職員全員で本校の魅力やこの学校で子どもたちにどのような力を身につけさせたいかを検討する取り組みが始まった。教職員から出た意見から、めざす学校像・めざす子どもの姿・めざす職員像と、本校が大切にしたい3つ柱「人とつながる」「ことばを育む」「未来を切り拓く」に集約してグランドデザインにまとめた。令和6年度からは学校経営計画に反映させ、日々の指導に取り組んでいる。

本稿では、令和5～6年度2年間の将来構想会議発足からグランドデザイン作成に至る経緯とその後の取り組み、成果と課題について報告する。

2 将来構想会議の背景

将来構想会議が立ち上がるきっかけが、幼児児童生徒数の減少や子どもたちの実態の多様化であることは先述したとおりである。在籍児数の減少で集団での学習や活動が維持しにくく、聴覚支援学校の利点である、同じ聴覚障がいのある仲間との協働学習や話し合い活動、自己認識等の取り組みには工夫が必要となる。子どもの実態においては、聴覚障がいの程度や主たるコミュニケーション手段も様々で、加えて聴覚以外の障がいを合わせ有する子どもの増加で、より個別的な対応も求められている。これらの変化に対応し、子どもたちに必要な教育を実現できる魅力ある学校づくりのために、何を大切にしていけるのかを、本校として改めて考える必要があった。

また、本校では早期教育から高等部専攻科まで幅広い年齢の子どもたちが在籍または支援を受けている。各学部の取り組みは確立されているが学部どうしのつながりが持ちにくく、一貫校としてのまとまりや、校内外に対しての学校の魅力のアピールが本校の課題であるとされてきた。

一方、学校教育に関連する動きとして、平成30年度から年次進行で実施が始まった新学習指導要領、令和3年中央教育審議会の答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」、令和5年大阪府策定の「第2次大阪府教育振興基本計画」も将来構想を考える上で重要なファクターとなった。

中教審答申と大阪府教育振興基本計画で示された子どもたちに育むべき資質・人物像は、将来の予測が困難な時代にあっても自他を大切に社会の中で自分らしく輝ける姿であり、本校の子どもたちにとっても、卒業後のめざす姿として指標となるべきものであった。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

図1-1 中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築を目指して」
急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

・人生を自ら切り拓いていく人
・認め合い、尊重し協働していく人
・世界や地域とつながり社会に貢献していく人

図1-2 第2次大阪府教育振興基本計画
大阪の教育が育む人物像

新学習指導要領では、学校全体として、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの確立が必要とされている。カリキュラム・マネジメントでは、学校の特色を生かした教育課程の編成と実施・評価・改善のPDCAサイクルのもと、教育活動全体を主体的に改善していくことが重要であり、その過程の一つとしてグランドデザイン（学校が育てたい児童・生徒像にもとづいて、めざす方向や果たすべき役割を描いた経営全体構想図）の策定がある。

このカリキュラム・マネジメントの考えのもと、本校の将来を学校全体で考え、課題や本校で大事にすべきことなどを共有し、より良い実践につなげるためのプロジェクト「将来構想会議」が立ち上がった。そして、学校として育みたい子どもの姿やめざす方向をグランドデザインでわかりやすく示し、幼児児童生徒・保護者・教職員・地域社会と共有することとした。

3 将来構想会議の発足とグランドデザイン作成に至る取り組み（令和5年度の取り組み）

表1 将来構想令和5年度の取り組み

時期	取り組み内容
令和5年夏ごろ	将来構想について管理職・首席・部主事で検討を始める
令和5年10月25日	将来構想会議発足・職員会議で提案
11月14~31日	教職員アンケート実施
11月~12月	在校生・卒業生へのアンケート実施
12月22日	第1回将来構想ミーティング
令和6年1月9日	第2回将来構想ミーティング
1月19日	職員会議で本校教育の3つの柱(人とつながる/ことばを育む/未来を切り拓く)を提案
1月23日	第3回将来構想ミーティング
2月	3つの柱に沿った各部の目標や取り組みを検討
2月19日	職員会議でグランドデザイン 一次案提案
3月7日	職員会議でグランドデザイン 最終案提案・承認

(1) 将来構想会議の発足

管理職・首席・部主事による検討を経て令和5年10月に全教職員に向けて、将来構想会議のビジョン（メッセージ・目標・流れ等）を示した。また、将来構想会議では全ての教職員で意見を出し合い進めていくことを説明した。

メッセージ

大阪で唯一、幼稚部～高等部・寄宿舎まである聴覚支援学校として、毎日奮闘している私たち教職員ですが、日々の授業準備・生徒指導・保護者対応などの業務に忙殺されて、本当に子どもたちに身につけさせたい力や、10年後・20年後の子どもたちの姿を思い描くことが難しくなっているのではないのでしょうか？

本校では0歳～20歳までの子どもたちを長期にわたり支援しています。その強みを活かし、聴覚障がい教育に携わる者として、子どもたちが10年後・20年後の社会で活躍する姿を思い描いて目標として定め、その為に今できる教育・支援・改革を模索し挑戦していきたいと考えます。各学部や経験年数の垣根を越えて、子どもも先生も未来に向かっていきいきと輝ける学校を一緒に考えて作っていきましょう。先生方のお力をぜひお貸しください。

図2-2 将来構想会議 メッセージ

最終目標

- ・本校の強み・魅力・売りを明らかにし、社会に出たときに身に付けておいてほしい力を考える。
- ・目指す学校像・生徒像・教育目標を全教職員が共有し、方向性を一つにして、教育活動や指導内容がそれに沿ったものかを見直し、魅力的な学校作りを進める。
- ・目指す学校像・生徒像・教育目標を実現するために必要な、施設整備や改革を行う

図2-3 将来構想会議 最終目標

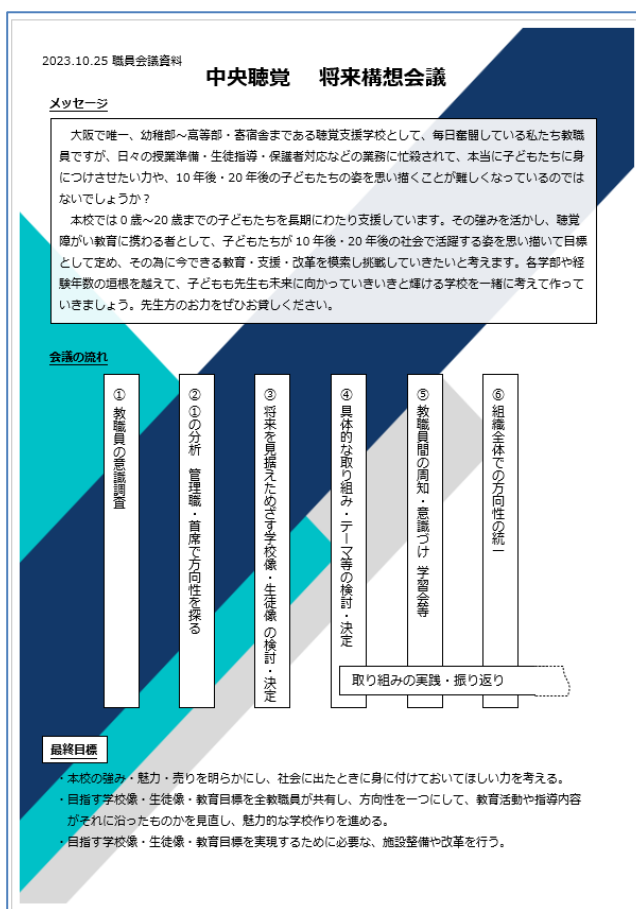


図2-1 将来構想会議 職員会議資料

(2) 教職員アンケート

全校教職員を対象に、本校の魅力や課題、めざす子ども像・教職員像のアンケート調査を実施した。めざす子ども像では子どもたちの卒業後の姿も思い描くために、先述の中教審答申と大阪府教育振興基本計画の一部を参考資料として配付した。アンケートから得られた意見を元に、将来構想ミーティングのテーマを決定した。（期間：令和5年11月14日～31日 回答数57）

理想の学校像/本校の魅力(自信を持って進められる活動)/本校の売り(生徒・保護者へのアピール)にしていきたいこと/育むべき姿(社会に出た時・高等部・中学部・小学部・幼稚部)/身につけたい力/憧れる教員の存在/理想の教職員像/満足度・改善点(指導方法、指導内容・学習形態、教職員連携、学部連携、在籍児数、施設設備)/自由記述

図3 将来構想アンケート内容

(3) 将来構想ミーティング

将来構想ミーティングでは、所属学部を交えて10人程度のグループを作り、ファシリテーターを中心にKJ法を用いたグループワークを行った。

第1回では自分の担当する子どもを思い浮かべて「子どもたちに身につけさせたい力」をテーマに話し合った。第2回では、「子どもたちへの関わり方・働きかけ方・授業等でよかったと思えること」や「自分が子どもたちのためにがんばっていること」をテーマにして、指導や教職員として大切なポイントを検討した。

各グループで出た意見は図4のようにジャンルごとにまとめ、全体で共有するとともに、2回のミーティングで出てきた共通のキーワードをもとに、管理職・首席を中心に本校教育で大切にしたい3つの柱を「ことばを育む」・「人とつながる」・「未来を切り拓く」に定めた。

第3回のミーティングでは、「ことばを育む」・「人とつながる」・「未来を切り拓く」の3つの柱について、本校の強み・課題・取り組みたいことを各自でワークシートに記入し、各グループで2024年度に実施すべき重点の取り組みについて意見を出し合った。

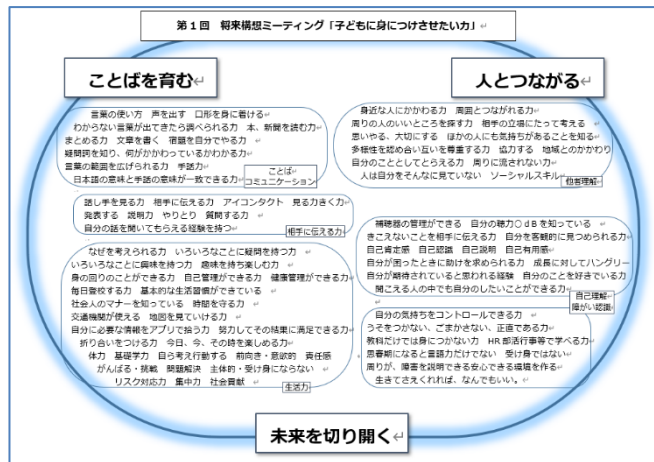


図4 第1回将来構想ミーティングのまとめ

(4) グランドデザインの完成

全3回の将来構想ミーティングの意見をもとに、管理職・首席・部主事でグランドデザインの内容をまとめた。

グランドデザインには、本校教育で大切にしたい3つの柱（人とつながる・ことばを育む・未来を切り拓く）を中心に、めざす学校像・めざす子どもの姿・めざす教職員像の具体的な内容と令和6年度の重点の取り組みを記載した。

他にも、3つの柱に沿った各部の目標も設定したが、内容の見やすさを考慮して公開するグランドデザインには掲載せず、別資料として作成した。最終案は3月の職員会議で承認を得て、グランドデザインの内容は次年度の学校経営計画や学校教育計画に反映させた。

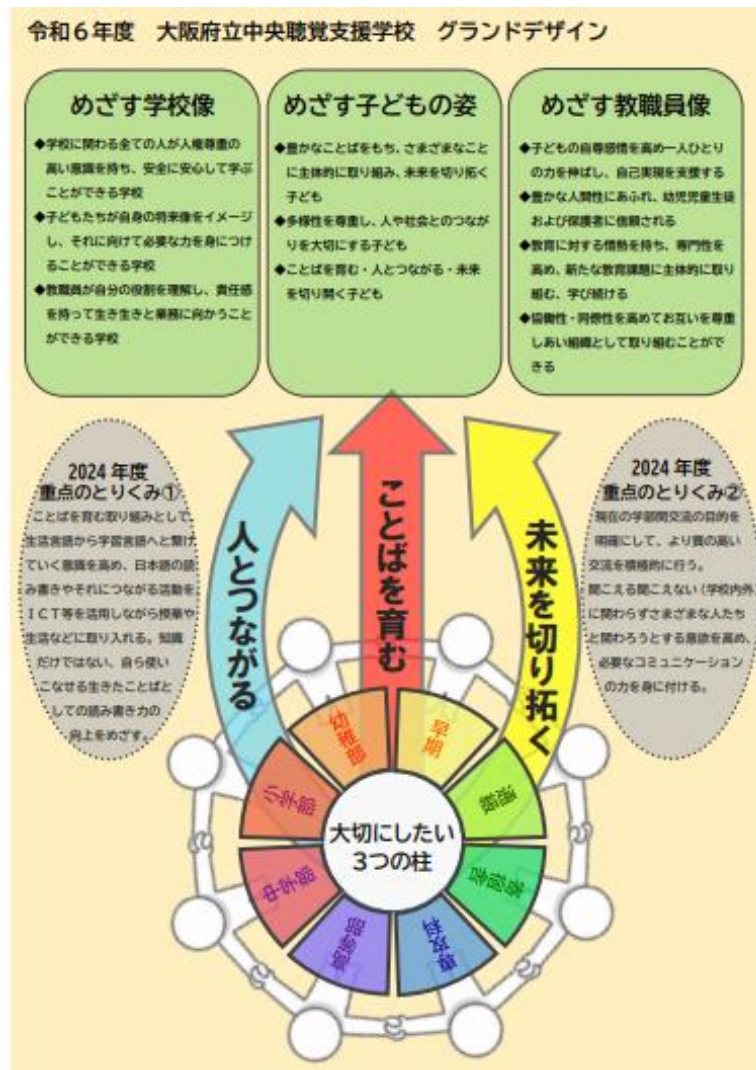


図5 令和6年度グランドデザイン

4 将来構想・グランドデザイン活用の取り組み（令和6年度の取り組み）

表2 将来構想令和6年度の取り組み

時期	取り組み内容
令和6年4月19日	職員会議でグランドデザインを教職員に説明
4月25日	PTA総会でグランドデザインを保護者に説明
5月13日	全校朝礼でグランドデザインを児童生徒に説明
5月23日	第1回将来構想学習会
6月～	給食時間中にグランドデザインの紹介を教室設置のモニターで表示
6月20日	第1回学校運営協議会で将来構想の取り組みを報告
7月19日	第1回将来構想ミーティング
9月4日	中高+幼小連携教科会
令和7年1月17~31日	教職員アンケート
2月20日	第2回将来構想学習会
3月21日	第2回将来構想ミーティング

(1) グランドデザインの周知

グランドデザインを教職員・幼児児童生徒・保護者・地域社会で共有するために、年度当初の職員会議・全校児童生徒朝礼・PTA総会・学校運営協議会で学校長より説明するとともに、学校ホームページにも掲載した。また、児童生徒向けに説明したスライドを給食時間中にモニターに表示した。

教職員においては、本年度の重点の取り組み①「生活言語から学習言語へつなげる意識と、生きたことばとして使える読み書き力」および②「質の高い交流とコミュニケーション力」について、授業等でどのようなことができるかを各部の部会で協議し、それぞれの授業や活動でグランドデザインを意識して取り組みを進めることとした。

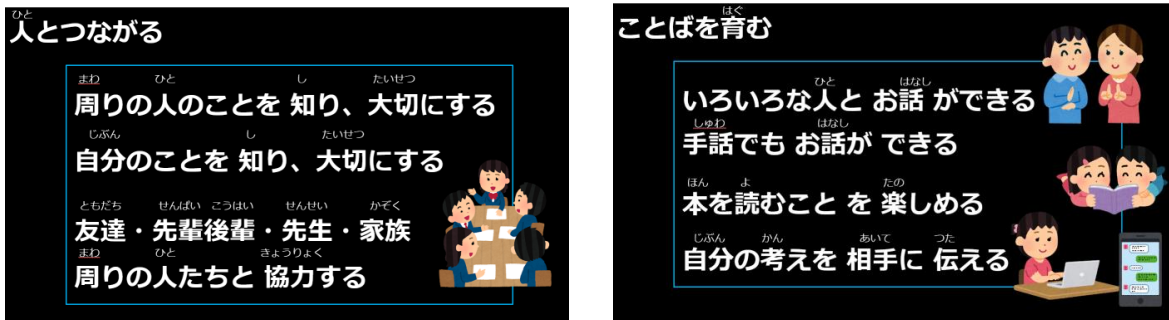


図6 幼児児童生徒用 グランドデザインの説明スライド

(2) 将来構想学習会

将来構想学習会は、全教職員を対象に本年度の重点の取り組みを進めていく上で必要な学びの機会として、従来から実施していた聴能学習会との共催で開催した。第1回の学習会では、小学部と高等部から「ことば」をテーマにした実践報告と共有を行った。「体験とことばの結びつけ」「挨拶から感じることばを使うということ」など、小学部での活動から高等部（卒業後）の繋がりを共有することができた。第2回の学習会は交流をテーマに、幼稚部と中学部の実践報告を行った。

(3) 将来構想ミーティング、中高（+幼小）連携教科会議

本年度の将来構想ミーティングでは、グランドデザインの重点の取り組みについての実践共有を目的とし、全教職員を対象に行った。昨年度と同様に各部を交えてのグループワークで他学部の取り組みを知り、自身の実践につなげる機会とした。第一回のテーマは「保育・授業等でのことばに繋がる活動について、テーマに沿ったグループ討議」とした。ことばに関する下記のテーマを設定し、各自が希望のテーマを選択してグループ編成を行った。

生活言語と学習言語／説明力／文章読解（読み取り）／日記・作文／絵本／行事の事前・事後指導／挨拶／題材の選び方／発問の工夫と意見の引き出し方／授業毎の振り返り方法／書字／漢字学習／ICTと板書の活用／語彙の拡充

図7 令和6年度第1回将来構想ミーティング テーマ一覧

ミーティングでは日ごろの実践や悩み、疑問の共有を行い、学部間の実態の理解につながった。また、一つの活動でも学部によって活動内容や目的が変わり、その活動の系統性を改めて確認する場にもなった。第2回は「今年度の実践の振り返り」をテーマに、3月の実施を予定している。

中高連携教科会は、毎年中学部・高等部教職員で行っているが、今年度は幼稚園・小学部教職員も加わり実施した。各教科で①今年度の取り組みについて②グランドデザインに関わる取り組みの意見交換（各教科の目標と具体的な取り組みについて）③その他教科で必要なことについて話し合った。教科ごとのまとめは下記のとおりである。グランドデザインをもとに、各学部における教科ごとの目標と具体的な取り組みに系統性を持たせて、一覧でわかるシートの作成を検討している。

<p>国語：作文での書きことばの学習や対話を通しての表現。物語を日本手話で表現する。就労・進学時に対応できる表現力の育成。</p> <p>社会：教科書の語句を大切に。問いに対して考える時間を取る。調べ方の学習。言いたいことを伝えられるような取り組み。</p> <p>数学：生活の中での数の問いかけや算数的な問いかけ。文章問題の読み取りが課題。</p> <p>理科：体験と語句の結びつけ。学習言語の習得。実験等による自分の考えの引き出し。教員が日本語の整理をして伝える。</p> <p>英語：間違ってもよいので、気持ちを伝えることの大切さを身につける。単語に片仮名でのルビ打ちなどみんながわかる工夫。</p> <p>保体：カード等による視覚的な活動とことばの結びつけ。話し合いの場やレポート課題での文章の添削。</p> <p>家庭：生活に関係することば（様子・用具・方法等）、知恵や工夫、思いが込められたことばを使う。</p> <p>美術：詩を読み取って絵を描くなど、ことばから表現につなげる。感覚の言語化。ことばが増えることで理解や表現も増える。</p> <p>音楽：歌詞を通してことばを育て、語彙を増やす。読めることで歌詞への興味を単語から手話へつなげる。</p> <p>技術・工業・生活・情報：ロゴマークの作成などキーワードをつなぎ表現する学習。作品展の取り組みを通じた活動とことばの結びつけ。</p>

図8 連携教科会 教科ごとのまとめ

(4) 教職員アンケート

グランドデザインの効果と活用状況について検討するために、教職員を対象にアンケート調査を実施した。アンケート項目は、年度当初に掲げた「授業や活動でグランドデザインを意識して取り組むこと」に対して、①教職員が意識できたか、②子どもたちが意識できたか、③その他意見とした。アンケートの結果、多くの教職員がグランドデザインの内容を意識して日々の教育活動に取り組んでいたことがわかった。以前から意識していたという回答も24%あり、グランドデザインの内容が、聴覚障がい教育で大切にすべきことを踏襲していることがうかがえた。意識する機会がなかったとする回答は10%程度みられた。子どもたちが意識できたかの質問には、30%が意識していたとする一方、意識していなかった・わからないとする回答が多く、子どもたちとのグランドデザインの共有には課題があるように考えられる。(期間：令和7年1月17日～31日 回答数37)

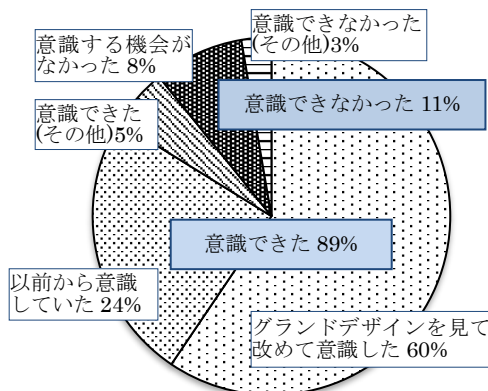


図9-1 教職員アンケート ①教職員が意識できたか

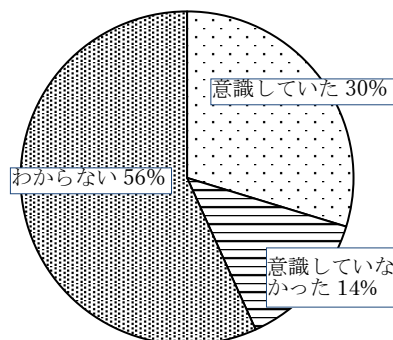


図9-2 教職員アンケート ②子どもたちが意識できたか

5 考察

(1) 成果

2年間の将来構想およびグランドデザインに関する取り組みでは、全教職員が参画して本校が大切にしたい教育やめざしたい姿を話し合い、検討を重ねていくことができた。その中で、今の本校の実態に即した目標や柱になるものを形にし、共有できたことは、私たちが学部をこえて一貫性のある教育活動を進めていくための契機となるだろう。また、他学部教職員とのグループワークを通して、他の学部の活動内容やねらいを知ることができ、学部のつながりや子どもたちの成長の見通し、これまでの学びの足跡に対する理解を深めることにつながった。

(2) 課題

一方、アンケートで示されたように、教職員のグランドデザインへの意識は広まりつつあるが、子どもたちに対しては「わからない」と受け止めている教職員が多く、子どもたち自身が本校の柱やめざす姿を意識しているかを確認する取り組みは十分ではない可能性がある。また、グランドデザインは学校経営計画と結びついていることにもあるように、理念だけでなく具体性を持った教育活動として、実施・評価・改善していくことが今後は求められる。

グランドデザインに掲げた本校の柱やめざす姿・重点の取り組みを実現していくためには、幼児児童生徒・保護者・教職員・地域社会と共有し、共に取り組むことが必要である。そして、子どもたち自身にも本校での学びを通して、何を身につけられるのか、そのために必要なことは何かを自ら考え実行してもらいたい。その過程において、必要に応じてグランドデザインや教育活動の改善を積極的に図っていきたいと考える。

現在、連携教科会では、「ことばを育む」「人とつながる」という本校の柱に対して、学部間の系統性を持たせた教科の目標と具体的な取り組みの表を作成中である。令和5年度末に作成した3つの柱に沿った各部の目標を、実効性のある評価指標としてアップデートすることも検討している。研究部の研究活動との連携や、学部・分掌の取り組みにグランドデザインの視点を取り入れられるよう、協力を仰いでいる。さらに、ミーティングや学習会を実践の振り返りや学部間連携、新たな視点の学びの場として活用していきたいと考える。このように学校教育全体を通して教科等横断的な取り組みを、本校がめざす教育の実現のために今後も積み重ねていきたい。

6 まとめ

本校では、児童生徒数の減少や実態の多様化を受け、令和5年度に「将来構想会議」を発足し、学校の目指す方向性を議論してきた。その成果として、3つの柱（人とつながる・ことばを育む・未来を切り拓く）を定め、それに基づいたグランドデザインを策定した。

令和6年度は、このグランドデザインを学校経営計画に反映し、教職員・児童生徒・保護者・地域社会と共有。将来構想学習会やミーティング、教科連携会議を通じて、実践の充実や学部間の連携強化による教育活動の向上を図った。

教職員の意識は高まったが、児童生徒への浸透には課題があり、今後はより具体的な教育活動や評価指標の改善を進めていく必要がある。今後も全ての教職員と共に、学校全体で一貫した教育活動を推進して子どもたちの成長実感を高められるよう取り組んでいきたい。

参考資料

中央教育審議会、2021「令和の日本型学校教育の構築を目指して」

(令和7年2月14日取得 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf)

大阪府、2023「第2次大阪府教育振興基本計画」

(令和7年2月14日取得 <https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/8676/kihonkeikaku.pdf>)

大阪府教育庁「カリキュラム・マネジメントの手引き」

(令和7年2月14日取得 https://www.mext.go.jp/content/20210909-mxt_kyoiku01-000016990_4o-te.pdf)

高木展郎「カリキュラム・マネジメント～新学習指導要領とこれからの授業づくり」

(令和7年2月14日取得 https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/054_001.pdf)

鳥取県とりネット「園・学校づくりのポイント集Ⅱ」

(令和7年2月14日取得 <https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1160314/03mokuji.pdf>)

「つながろう みんなと 飛び出そう、社会へ」

令和4－6 学校経営推進費 事業の報告

教 頭 堀 谷 留 美

1 はじめに

本校は、令和4年度から6年度の3年間、大阪府の「学校経営推進費」の支援を受けた。これは、大阪府が、大阪府教育振興基本計画を踏まえ、高い効果が期待できる事業計画を提案する府立学校と私立高校に対し行う予算措置である。今年度で、事業が完了するので、この3年間の取り組みについて報告する。

2 本計画について

(1) テーマ「つながろう みんなと 飛び出そう、社会へ」

(2) 目標

「外部とのつながり」を広げ、「表現力を磨いて発信」し、たくましく生きる力を育てていく。

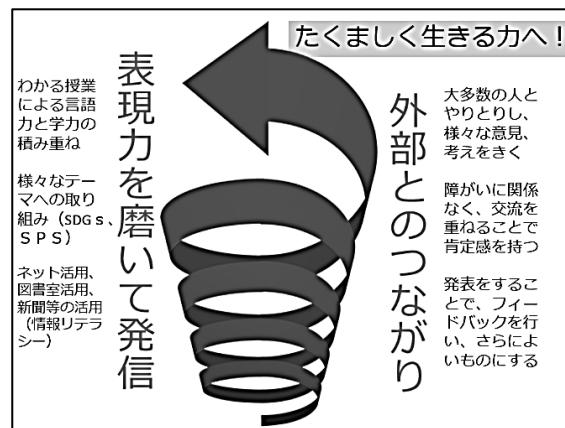
- ① ICT機器の活用や視覚支援を充実させ、「見てわかる授業」を展開することで、児童生徒の言語力を高め、表現を豊かにしたり、論理的思考力を高めたりする。
- ② 卒業生の活動に触れたり、さまざまな職場体験を行ったりすることで、自己の将来像を描きやすくし、キャリア発達を支援する。
- ③ 継続してきた学校間交流を発展させ、対面あるいはオンラインにおいて、多くの人と意見交換を行う合同授業を実施する。SDGs、表現活動などテーマを持った活動に共に取り組み、幅広い仲間とつながる。
- ④ 同世代のみの交流にとどまらず、自らの学びを地域や社会に発信し、校内外を越えた豊かなコミュニティを形成する。

(3) 本計画の立案までの経過

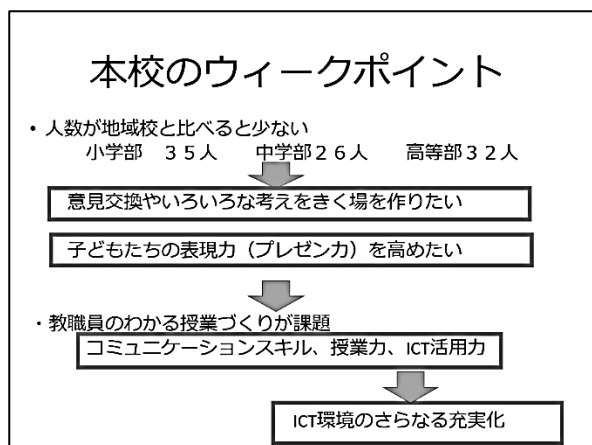
本校の幼児・児童・生徒は、聴覚障がいや有しており、音声言語の習得は聴覚のみでは難しい。そのため、聴覚障がいの特性を踏まえたうえで指導を進める専門性が教職員に求められている。準ずる教育課程で学ぶ児童・生徒は、きこえ方や中心となるコミュニケーション手段はそれぞれ異なっているが、きこえない・きこえにくいこと以外はきこえる子どもと同じ力を持っている。彼らが「社会に出て、きこえる人とともに、かつ対等に生きる」力を伸ばすことが本校のミッションの一つである。同時に、複数の障がいを併せ有する子どもたち一人ひとりに合わせた教育活動を進め、彼らのできることを増やし、将来への可能性を広げていくこともミッションである。子どもたち一人ひとりの力を伸ばすために、教職員は「わかる授業」を進めて言語力と学力、さまざまな力を身につけさせていかなければならない。

一方で、子どもたちは自身の障がいについて、将来への漠然とした不安をかかえがちである。卒業が近づいて進路について考え始めるときに、その不安はますます深刻なものとなっていく。そのためにも、早い時期からキャリア教育に力を入れて、彼らが自身のできることでできないことに向き合い、障がいを認識し自己肯定感を高めて、社会参加、就労等に前向きになるように進めていく必要がある。

そこで、本校としては、「意見交換やいろいろな考えをきく場を設ける」「子どもたちの表現力



（プレゼン力）を高める」ことを本事業の目標に据えた。しかし、本校の人数が地域の学校と比べると少ないという課題がある。これらを解消するために、外部との交流やつながる機会を作り、いろいろなやりとりを広げながら、子どもたちの表現力を高めることをめざした。ただし、子どもたちの表現力を高めるためには、言語力や学力の向上が不可欠である。そこで本事業では教職員は、コミュニケーションスキル、授業力、ICT活用力を伸ばしてわかる授業づくりに努めることも目標に置くこととした。



幼児・児童・生徒の実態

- ・音声言語の獲得は、聴覚のみでは難しい
- ・コミュニケーションは多様
 →配慮や工夫が必要
 それ以外は、きこえる子どもと同じ力を持っている。

本校のミッション
 「社会に出て、きこえる人ともに、かつ対等に生きる子どもに！」

- ・将来への漠然とした不安から深刻な不安へ
 →キャリア教育の重要性

自分の障がいに対する認識を深め、
たくましく生きる力を！

3 実施状況

(1) 1年目（令和4年）

1年目は、ICT環境がより整うように機器等の設置、整備を進めた。電子黒板機能付き超単焦点プロジェクター（壁取付式）を各学部の主要教室に設置し、またほかの教室にも既存のディスプレイタイプ電子黒板や大型モニターを置き、授業でより視覚的教材が活用できることをめざした。

当時は新型コロナウイルス感染防止対策がまだとられており、交流もオンライン形式が多かった。そこで、オンラインによる交流でもお互いのいる場所がより広範囲にわかるように、コミュニケーションロボットを購入した。これはタブレットを取り付けると、上下、左右に動き、相手にとってはこちら側の部屋の状況がさらに見えるようになる物である。

また本校の研究部が「リフレクション」を研究テーマに掲げ、わかりやすい授業を振り返る取り組みを始めていたので、教職員の授業力、ICT活用力を生かした授業づくりにも取り組むことができた。

(2) 2年目（令和5年）

新型コロナウイルス感染症が、5類感染症に移行し、交流も遠隔の形式から対面形式に戻っていった。したがってこの年は、交流は遠隔、対面の両方の形式で行っている。中学部は、アブロードインターナショナルスクールと初めて交流し、外国にルーツを持つ生徒や日常的に外国語で会話をしている生徒とコミュニケーションを図った。日本手話やアメリカ手話をテーマに、英語と日本語、身振り、筆談もまじえて交流発表を行った。中学部はその後も大阪府立北視覚支援学校と交流会をもち、自分と異なる障がいを有する生徒と点字を使うなどして通じ合った。また小学部で奈良県立ろう学校とオンライン交流、中学部は和歌山県立和歌山ろう学校とオンラインで国語の合同授業を行った。高等部は、福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校、府立咲くやこの花高等学校とは対面で交流、合同学習を行った。初めて交流した学校が複数あり、テーマを決めて、情報を整理して相手に伝えたり、発言を結びつけて話し合ったりする活動を行った。

キャリア教育についても、対面での講演、見学等が可能になったため、直接講師を学校に呼び、対面型の講演会を行うことが増えた。各学部で聴覚障がいを有する成人や卒業生を呼んでロールモデルによる講演会、先輩ろう者を囲む会などを行った。

また「子どもたちの表現力（プレゼン力）を高める」ことをめざして、中学部高等部で保健活動、防災等に関する地域的な取り組みを行った。中学部では、生徒会が中心となって、同じ学校の幼稚部、小学部に出向いて、手洗い・うがいの大切さを発表した。その際に中学部生徒が幼児・児童それぞれの発達段階に応じて、同じ内容であっても寸劇をしたり、幼児の好きなキャラクターの被り物をかぶったりするなど工夫を凝らしていた。同年に、大阪府立学校保健研究発表大会で、中学部生徒が、この取り組みを発表して、次年度の全国大会代表に選ばれた。

教職員の授業力を高めるために、講師を招聘して、全学部または各学部で聴覚障がい教育の基本、ICT活用方法の研修を実施した。

- ・「きこえない・きこえにくい子どもの授業づくり」講師：長南 浩人氏(筑波技術大学教授)
 - ・「聴覚障がい教育とICTの在り方」講師：大久保 紀一朗氏(京都教育大学講師・元島根大学准教授)
- (3) 3年目(令和6年)

令和5年度末に、教職員が集まり、本校の「将来構想」について話し合いを重ねた。教職員それぞれの意見を吸い上げてできたものが、グランドデザインであり、この3つの柱のうち「ことばを育む」「人とつながる」ことが、令和6年度の教育活動の基盤すなわち本事業の基盤ともなった。(詳細は別稿 p42～を参照のこと)

ことばを育む活動については、各学部の研究報告に譲るが、その際本事業で整備したICT機器が活用されていた。

人とつながる活動では、各学部で以前から交流を行ってきた相手校と、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の形に戻った学部もあった。小学部では奈良県立ろう学校と前年度とは学年を変えてオンライン交流を行った。高等部は大学へ出向き講義を体験する取り組みも行った。またろうの先輩を呼び、話をきく場を各学部で設けた。様々な職種、経歴を持つろう成人の姿を見、話をきくことで、児童生徒が自身の将来像のイメージを描くことをめざした。秋には、橋本一郎氏(亜細亜大学 特任准教授)を招聘し、「飛び出そう、社会へ きこえない・きこえにくい先輩たち」の演題で、中学部高等部生徒に様々な職種に就いている成人の紹介をしていただいた。同日、同じ講師に教職員対象に「ろう難聴生徒の修学・進学と課題」について講演いただいた。

本事業の目的の1つである「子どもたちの表現力(プレゼン力)」に関しては、高等部専攻科の生徒たちが、「中学生たちが高等部に行ってみたいなと思えるような学校にするにはどうしたらいいか？」を考え、校舎の廊下改装を提案した。その提案を具体的に計画書に仕上げ、企業関係者相手にプレゼンテーションする機会を持った。その結果、改装の実現に向けて協力をいただくことができた。中学部生徒会が前年度行った保健活動の取り組みでは、大阪府代表に選ばれた結果、全国健康づくり推進学校表彰事業の最優秀校の表彰をいただくことができた。

4 振り返り、反省

本校研究部が掲げた研究テーマ「リフレクション」に基づいて、各学部の研究、実践活動が進められた。その基盤に本研究の理念、目標があり、「学校経営推進費」を十分活用することはできたと言える。各学部の取り組みは、別稿で詳しく述べられている。

しかし、「ICTを有効に活用して授業を進める」「ロールモデルを招聘するなどしてキャリア教育を充実させる」「児童・生徒が本校の取り組みを発信する」などの活動は進められたが、それを統合し振り返る機会がなかなか持てなかった。児童・生徒の変化、成長は見られたが、校内で統一した評価指標がなかったため、それぞれの学部での評価になり、校内で共有するまでにはいかなかった。

また設備、機器面では、オンライン交流や合同学習で、コミュニケーションロボットを活用する予定だったが、操作がなかなかうまくいかず、十分に活用したとは言いがたい。ほとんどの交流活動が、遠隔形式から対面形式に移行したため、使用頻度が減ってしまった。しかし、今後も遠距離にある学校とは再びオンライン交流を続ける予定があるため、機器の有効活用には取り組み続けていきたいと考えている。

5 まとめ

本事業は、3年間、各学部が取り組んできた教育活動、研究活動の基盤となり、また支えてきた(学部それぞれの活動の詳細については、各学部の報告を参照いただきたい)。同時に進行していたのは「将来構想」であり、本事業とは別に、教職員が部を超えて集まって、一人ひとり現在子どもたちに必要なもの、力について思うことを出し合った。これらをまとめてできたのが、グランドデザインである。このグランドデザインの3つの柱は、「ことばを育む」「人とつながる」「未来を切り拓く」となった。本事業の目標「外部とのつながりを広げ、表現力を磨いて発信し(そのために言語力・学力を伸ばす)、たくましく生きる力を育てていく」とほぼ一致している。これらは、聴覚障がい教育、そして本校教育の原点、基礎的なものであると言えよう。これで3年間の事業は完了するが、今後も教育活動、研究活動はこれらの理念を追い求めながら続けていきたいと考えている。

学校経営推進費 事業計画書

1. 事業計画の概要

学校名	大阪府立中央聴覚支援学校
取り組む課題	D 生徒の自立を支える教育の充実
評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援学校における児童・生徒、保護者の学校満足度の向上 ・ 支援学校における地域連携と外部への情報の発信
計画名	「つながろう みんなと 飛び出そう、社会へ」

2. 事業計画の具体的内容

学校経営計画の 中期的目標	<p>子どもたちの学ぶ力の育成とキャリア形成をはかり、変革する社会で生き抜く力を育む。</p> <p>(1) 将来の自己実現をめざしたキャリア教育に取り組み、自主性・社会性を育む。</p> <p>(2) 知的好奇心を刺激し、子どもたちの学びへの意欲の向上を図る。</p>	
事業目標	<p>聴覚支援学校では、授業や行事等において、子どもたちの聴覚障がいの状態に応じた視覚的な情報保障が重要である。本校では、手話での説明に加え、ICT 機器の活用により、文字、音声、画像を統合的に発信し、子どもたちの個々のニーズに合わせて情報を獲得している。(文字情報システムによる緊急時放送や、電子黒板やタブレット端末等を活用した授業・HR 活動等)。そうした中、遠隔コミュニケーションロボットやオンラインを活用することにより、さまざまな進路実態を知り、自らの将来像を描きやすくし、日々の学習意欲の向上につなげたい。また、固定化された学校内だけの活動にとどまらず、オンラインやロボットを通じて他校との交流を深化させる。さらに、オンラインによる合同授業を実施し、初めて関わる子ども達とテーマを決めた意見交流をすることで視野を広げ、物事を多面的、多角的に捉える力を伸ばすとともに、自らの学びを地域社会に情報発信する力を育む。</p> <p>① ICT 機器の活用や視覚支援を充実させ、「見てわかる授業」を展開することで、児童・生徒の言語力を高め、表現を豊かにしたり、論理的思考力を高めたりする。</p> <p>② 遠隔コミュニケーションロボットを活用し、卒業生の活動に触れたり、さまざまな職場体験を行ったりすることで、自己の将来像を描きやすくし、キャリア発達を支援する。</p> <p>③ 継続的してきた学校間交流を発展させ、オンライン等を活用しながら、多くの人と意見交換を行う合同授業を実施し、SDGs などテーマを持った活動に共に取り組み、幅広い仲間とつながる。</p> <p>④ 同世代のみの交流にとどまらず、自らの学びを地域や社会に発信し、校内外を越えた豊かなコミュニティを形成する。</p>	
取組みの概要	整備する 設備・物 品	電子黒板機能付き超単焦点プロジェクター（壁取付式）、kubi テレプレゼンスロボット、アクションカメラ（GoPro）、動画編集ソフト、字幕ソフト、液晶ペンタタブレット、ペイントソフト、マグネット式スクリーン、160 インチスクリーン
	取組 内容	前 年 度
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 小・中・高ともオンラインによる学校間交流。 ・ 対面、またはオンラインにて社会で活躍するさまざまな人の話を聞く。(小1回、中7回、高3回) ・ オンライン教育会議や情報教育部による授業づくりの支援。 <p>(G-suite 活用ガイドライン、活用マニュアルの作成、教員向け研修会(3回)、Zoom や Google クラウドルームを活用した遠隔学習の実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ わかる授業づくりのための整備 - 電子黒板付き単焦点プロジェクター増台、タブレット端末の活用。デジタル教科書の購入。 ・ 学習成果(境界線の学習、SDGs、学校安全活動)を、保護者会、120周年記念式典、文化祭などでプレゼンを行った。

初年度	<ul style="list-style-type: none"> 各学部で ICT 機器の活用を促進し、調べ学習や合同学習での学びを、プレゼン資料や映像化し、HP や行事等で発信する。 遠隔コミュニケーションロボットやオンラインを活用して、学校間交流を充実させる。合同授業を行う。 聴覚支援学校とテーマを決めた合同授業を行う。意見交換の場を広げる。 教職員向け ICT 機器使用のための研修（8月） 児童・生徒への授業アンケートの分析と情報共有（12月）学校教育自己診断の分析と情報共有（12月） プロジェクトチーム1年目の検証、改善に向けての検討、活用方法の収集（3月）
2年め	<ul style="list-style-type: none"> 遠隔コミュニケーションロボットを利用し、いろいろな職業の人の話をきく。また実際の職場の様子を見てリアルに体験する。 遠隔コミュニケーションロボットやオンラインの活用により、SDGs や学校安全活動などのテーマを決めた交流学习や発表を行う。交流校を広げる。 SDGs 講師、企業講師の招聘 SDGs に関する地域的な取り組み（児童・生徒の製作物などを HP に掲載） 教職員向け ICT 活用方法の研修（8月） 児童・生徒への授業アンケートの分析と情報共有（7、12月）学校教育自己診断の分析と情報共有（12月） 各学部の教員による授業研究と情報共有（12月） プロジェクトチーム2年めの検証、改善に向けての検討、活用方法の収集（3月）
3年め	<ul style="list-style-type: none"> 保護者や地域へ発表の場を広げ、SDGs や防災について共に取り組むコミュニティへと広げる。 国内外の学校園と交流会を行う。 児童・生徒への授業アンケートの分析と情報共有（7、12月）学校教育自己診断の分析と情報共有（12月） 公開授業を実施（2月） プロジェクトチーム3年めの検証、取り組みをまとめ、冊子、HP などで外部へ公開（3月）
取組みの 主担・実 施者	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトチーム 首席、情報教育部長、進路サポート部長、各学部主事、有志 実施者 学部でのまとまりを基本し、学年や学部の子どもたちの活動に関わる全ての教職員。
初年度	<p>学校教育自己診断、授業アンケートより</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 児童・生徒記入、保護者記入の「見てわかる授業の満足度」の肯定率を 78%以上とする。現 75% ② 教職員「ICT 機器活用力」の肯定率を 70%以上とする。現 62% ③ 児童・生徒「交流が楽しい、世界が広がった」の肯定率を 70%とする。新たなアンケート近隣の学校園と学校間交流を充実させる。合同授業を行う。
2年め	<p>学校教育自己診断、授業アンケートより</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 児童・生徒記入、保護者記入の「見てわかる授業の満足度」の肯定率を 82%以上とする。 ② 教職員「ICT 機器活用力」の肯定率を 75%以上とする。 ③ 児童・生徒「交流が楽しい、世界が広がった」の肯定率を 75%とする。国内の学校園、企業などとの共同授業・交流会を行う。
3年め	<p>学校教育自己診断、授業アンケートより</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 児童・生徒記入、保護者記入の「見てわかる授業の満足度」の肯定率を 85%以上とする。 ② 教職員「ICT 機器活用力」の肯定率を 80%以上とする。 ③ 児童・生徒「交流が楽しい、世界が広がった」の肯定率を 80%とする国内外の学校園と交流会を行う。SDGs や防災の取り組み等を地域へ発信し、共に取り組むコミュニティを形成する。